

りしかど、後には、ありしより猶たはれさせ給ひし程に、永福門院の御さしつぎの姫君、はや御盛も過ぐる程なりしを、この法皇にまゐらせ奉らせ給へりしが、かひくしく、水の白波に若やがせ給ひて、やがて院號ありしかば、昭訓門院と聞えつるその御腹に、をとどしばかり、若宮生れ給へるを、限りなく愛しきものに思されつるに、今少しだに見奉らせ給はずなりぬるを、いみじう思されけり。

さてしもあらぬならひなれば、同じ十七日に御わざの事せさせ給ふ。理といひながら、いといかめしう人々仕う奉り給ふ。網代庇の御車、前、右大臣殿よせさせ給ふ。烏帽子直衣、袴きはにて参り給ふ。院のうへも庭におりさせ給ふ。山の座主、聖護院、十樂院、三人の法親王たちなどは、藥杵をぞ奉りて、上の山まで御供せさせ給ふ。上達部には前、右大臣公衡、西園寺大納言公顯、萬里小路、大納言師重、源中納言有房、三條前、中納言實躬、宗氏の二位、重經の二位、爲雄の宰相、經守、爲行、親氏などなり。殿上人は頼俊朝臣、忠氏、爲藤、國房、經世、泰忠、光忠、皆狩衣の袖をしぼりく参る氣色さへ、あはれを添へたり。院も御供にひきさがりて参り給ふ。花山院、權大納言、西園寺、中納言、土御門、大納言、御子親實の少將、御太刀持ちて御供せられたり。よそほしかりつる御ありさまも、いとほどなく、只時の間の煙にてのぼり給ひぬれば、誰もく夢の

心ちして、ほのくと明けゆく程に、おのくまかんで給ふ。三條、大納言入道公貫、萬里小路、大納言師重などは、とりわき御志ふかくて、御茶毘の果つるまで、墨染の袖を顔におし當てつ候ひ給ふ。かねてより山道つくられて、木草きり拂ひなどせられつれど、露けさぞ分けむ方なき。涙の雨の添ふなるべし。内よりの御使に、はじめ長親朝臣、雅行、有忠朝臣など、三度まゐる。ふるき例なるべし。

おなじき二十六日、院の上御素服たてまつる。おはします殿には、黒き絲にてあみたる簾をかけらる。淺黄べりの御座に、うへの御衣は黒く、うへの御袴は、裏かむじ色、御下がさねもくろし。おなじひへぎ、淺黄の御檜扇、御臺まゐるも、皆黒き調度どもなり。この御序に、御方々も御素服たてまつる。昭訓門院、昭慶門院、近衛殿の北政所、關白殿の北政所、良助法親王、覺雲、順助、慈道、性惠、益性、行仁、性融法親王たち、上達部も、お山の御供し給ふ人々みなもれず。院の二の御子の御母も、近頃は法皇召しとりて、いと時めかせて、准后など聞えつれば、思ひ歎き給ふべし。昭訓門院は、やがて御髪おろし給ふ。法皇は五十七にぞならせ給ひける。御骨も、この院に法華堂を建て、をさめ給へば、龜山院とぞ申すべかめる。禪林寺殿をば、おはしまし、時より、禪院になされき。南禪院といふはこれなめり。



院の二のみこの御母、忠繼の宰相の女、今は准后と聞ゆる御腹におはします。この頃帥の宮と聞ゆるを、法皇とりわき御傍さらすならはし奉り給ひて、いみじうらうたがり聞えさせ給ひしかば、人より殊に思し歎くべし。頃さへしぐれがちなる空のけしきに、山の木の葉も涙あらそふ心地して、いと悲し。所がらしも、いとあはれを添へたり。川浪のひゞき、となせの瀧の音までも、とり集めたる御心の中どもなり。御日數のほどは、帥の宮ひとつ御腹の内親王なども、この院におはしますほど、つれづれなるまゝに、はかなし事など聞えかはして、花紅葉につけても、睦まじくなれ聞え給ふべし。

帥の御子は、大多勝院の西の廂にわたらせ給ふ。御前の松の木に、這ひかゝれる蔦の紅葉の、いたう染めこがしたるをとりて、九月三十日の夕つかた、昭訓門院の御方へ奉らせ給ふ。

あすよりの時雨もまたで染めてけり袖の涙や蔦のみみぢ葉

木の葉よりもろき御涙は、ましていとせきかね給へりし。御かへし。

よもは皆なみだの色にそめてけり空にはぬれぬ秋のみみぢ葉

あはれに見奉らせ給ひつゝ、名残もいみじく眺められて、高欄におしかゝり給へる夕ばえの御かたち、いとめでたし。ありつる紅葉を、西園寺大納言公顯の宿直所へ遣はす。

雨とふるなみだの色やこれならむ袖よりほかに染むるのみみぢ葉

女院の御兄なれば、しめやかなる御山住の心苦しさに、さぶらひ給ふなりけり。御返事、

いくしほか涙のいろのそめつらむ今日を限りの秋のみみぢ葉

時雨はしたなく、風あらゝかに吹きて暮れぬれば、宮、内に入り給ひて、御殿油近く召して、晝

御覽じさしたる御經など讀み給ふ程に、若殿上人どもうち連れて、こなたの御宿直にまゐれり。晝

の蔦の葉の散りぼひたるを、人々見るに、宮、それにおのゝ歌書きて」とのたまへば、中將爲藤

朝臣、

もみぢ葉に泣く音はたえず空蟬のからくれなるも涙とや見む

清忠、朝臣

山姫のなみだの色もこのころはわきてや染むる蔦のみみぢ葉

光忠、朝臣

世の中のなげきの色を知らねばやこぞに變らぬ蔦のみみぢ葉

これらをと集めて、北殿の内親王の御方へ奉らせ給ひければ

さすがなほ色は木の葉に残りけりかたみ悲し秋のわかれ路



雨うちそゞぎて、けはひあはれなる夜、いたう更けて、帥宮、例の北殿へ参り給へれば、姫宮も御殿籠りぬ。候ふ人々も、みなしづまりぬるにや、格子などたゞかせ給へど、開くる人もなければ、空しく歸らせ給ふとて、書きてさしはさませ給ふ。

帥宮 おのづから眺めやすらむとばかりにあくがれきつる有明の月  
御かへし、またの日、

駿子 いたづらに待つよひすぎし村雨は思ひぞたえしありあけの月

月日程なくうつりぬれば、院も宮々も、おの／＼ちり／＼にあかれ給ふほど、今少し物悲しさまざる御心のうちどもは盡きせねど、世のならひなれば、さのみしもはいかゞ。昭慶門院は、あまたの宮たちの御中に、勝れて愛しきものに思ひ聞えさせ給ひしかば、御處分なども、いとこちたし。大井河に向ひて、離れたる院のあるをぞ奉らせ給へれば、そこにおはしまし、程に、川端どの、女院など、人は申し侍りし。かの所は臨川寺とぞいふめる。都にも土御門室町にありし院、いづれも、この頃は、寺になりて侍るめりとぞ。めでたくこそあはれなれ。

第十五 うら千鳥

院のうへは、御位におはせし程は、なか／＼さるべき女御更衣も候ひ給はざりしかど、おりさせ給ひて後は、御心のまゝに、いとよく紛れさせ給ふほどに、この程は、挑みがほなる御方々、數そひ給ひぬれど、なほ遊義門院の御志に、立ち並び給ふ人は、をさ／＼なし。中務の宮の御女も、おしなべたらぬ様にもてなし聞え給ふ。勝れたる御覺えにはあらねど、御姉宮の、故院にわたらせ給ひしよりは、いと重々しう思しかしづきて、後には院號ありて、永嘉門院と申し侍りし御事なり。又一條、攝政殿の姫君も、當代堀川の大臣の家にわたらせ給ひし頃、上藤に、十六にて参り給ひて、初めつ方は、基俊の大納言、疎からぬ御中にておはせしかど、かの大納言の東下りの後、院に参り給ひしほどに、殊の外にめでたくて内侍のかみになり給へる、昔覺えておもしろし。加階し給へりしあした、院より、

後多 そのかみに頼めしことのたがはねばなべて昔の世にやかへらむ  
御返し、内侍のかみの君瑣子、



契りこしころの末は知らねどもこのひとことやかかはらざるらむ

露霜かさなりて、ほどなく徳治二年にもなりぬ。遊義門院そこはかとなき御惱と聞えしかば、院後多の思し騒ぐ事かぎりなし。よろづに御祈いり、祭祓まつらへとのしりしかど、かひなき御事にて、いとあさましくあへなし。院も、それゆゑ御髪みかみおろして、ひたぶるに聖ひじりにぞならせ給ひぬる。その程、さまざまのあはれ思ひやるべし。悲しき事ども多かりしかど、みな漏もしつ。

明くる年の春、八幡の御幸の御歸りさまに、東寺に三七日おはしまして、御灌頂こくわんちやうの御加行けぎやうとぞ聞ゆる。仁和寺の禪助僧正を御師範にて、かの寛平の昔を思おもすらむ、密宗をぞ學まなせさせ給ひける。六月には、龜山殿にて、御如法經かゝせ給ふ。御髪みかみおろし給ひて後は、大かた女房は仕うまつらす。男おのこ、番つがひにおりて御臺みだいなども參らせ、よろづに仕うまつる。いつも御持齋ごもちさいにておはします。いとありがたき善智識ぜんちしきにてぞ、故女院はおはしましける。嵯峨の今林殿にて、御佛事なども、日々に怠いとらすせさせ給ふ。この今林は北山の准后のおはせし跡なり。遊義門院の御髪みかみにて、梵字縫ぼんじぬはせ給へり。かの御手のうらに、法華經一字三禮ほつげきんいちじゆさんらいに書かせ給ひて、攝取院せつしゆいんにて供養せらる。大覺寺の覺守僧正御導師なり。故女院の御骨みこつも、今林に法華堂建ほつげだうてられて、おき奉らせ給へれば、月ごとの二十四日には、必じ御幸ありけり。思し入りたる程いみじかりき。

かくて八月の初めつかたより、内うのうへ例ならずおはしますとて、さまざまの御修法ごしほ、五壇ごだん、薬師やくし、愛染あいぜん、いろくの祕法ひほうども、諸社の奉幣神馬ほうへいじんめ、何かとのしり騒ぎつれど、むげに不覺ふかくにならせ給ひて、二十三日御氣色けしきかはるとて、世のひゞきいはむ方なく、馬車うまぐるま走りちがひ、所もなきまで、人々は参りこみたれど、いとかひなく、二十五日子の時ばかりに、はてさせ給ひぬ。火の消えぬるさまにて、かきくれたる雲の上のけしき、いはすとも推し量おられなむ。まことや、中宮ちゆうぐうは徳大寺の公孝の太政大臣おほきの御女みよめぞかし。珍しくかの御家に、かゝる事のいたくなかりつるに、御覺ごかくえもめでたくて候ひ給へるに、あさましといはむ方なし。二十八日にまかで給ふ。先帝せんたいの御わざの沙汰さたあり。院號ありて、後二條院とぞ聞ゆる。堀川右大將具守御車みけよせらる。心のうちいかばかりかおはしけむ。大將になり給へるも、この御門ごもんの、西華門院せいけむつまじうも仕う奉り給へるに、いとほしき御事なり。御素服みすふくを著給はざりしをぞ、思はずなる事に、世の人ひともいひさたしける。内侍うち侍の督かむの君もさまかはり給ふ。中宮ちゆうぐうも院號ありて、長樂門院と聞ゆ。よろづ哀なる事のみ、書き盡つくしがたし。

春宮はるぐうは正親町殿せいしんちやうへ行啓ゆききなりて、劍璽けんじわたさる。八月二十五日踐祚せんそなり。十二にぞならせ給ふ。夢ゆめのうちの心地こころしつゝも、ほどなく過ぎうつる御日數みひかずさへ果てぬれば、盡きせぬあはれさむる世なけ



れど、人々もおのがちり／＼になる程、今一しほ堪へがたげなり。持明院殿には、いつしかめでたき事どものみぞ聞ゆる。大覺寺殿には、遊義門院の御事にうちそへて、御涙のひる世なく思さるべし。帥のみこの御事を、あづまへ宣ひ遣したる、相違なしとて、九月十九日立太子の節會ありて、坊に居給ひぬ。今はと世をとおむる心地しつる人々、少し慰みぬべし。その年十月大なりつるを、保元の例とかやとて、十一月朔日に宣下せられたり。新しき御代にあたりて、月日さへ改まりにけり。十一月十六日御即位あり。攝政は後照念院殿平、今日は御悦申ありて、やがて行幸にまゐり給ふ。あるべき限りの事ども、ふるきに變らで、めでたく過ぎ行きぬ。

延慶二年十月二十一日御禊、おなじ二十四日大嘗會、應長元年正月三日、御年十五にて御冠し給ふ。御諱富仁と聞ゆ。ひきいれには殿、理髪家平つかうまつり給ふ。南殿の儀式はて、御粧改めて、更に出でさせ給ふ。清涼殿にて御遊はじまる。攝政殿等いふ名物、右大將公顯琵琶上、土御門、大納言冬時笙、和琴大炊、御門、中納言冬氏、笛は西園寺、中納言兼季、別當季衛笙の笛吹き給ひけり。筆筆公守、朝臣、拍子有時、めでたくさま／＼おもしろくて明けぬ。五日には後宴とて、今すこしなつかしう面白き事どもありき。この御門をば、新院の御子になし奉らせ給ひしかば、朝覲の行幸の御拜なども、この御前にてぞありける。廣義門院も、同じく國母の御心地にて、よろづ

めでたかりき。

院のうへ、さばかり和歌の道に御名たかく、いみじくおはしませば、いかばかりかと思されしかども、正應に、撰者どもの事ゆゑに、煩どもありて、撰集もなかりしかば、いと口惜しう思され

我が世にはあつめぬ和歌の浦千鳥むなしき名をや跡に残さむ

など、詠ませおはしましたりしを、今だにと、急ぎたゞせ給ひて、爲兼の大納言うけたまはりて、萬葉よりこなたの歌ども集められき。正和元年三月二十八日奏せらる。玉葉集とぞいふなる。この爲兼の大納言は、爲氏の大納言の弟に、爲教、右兵衛、督といひしが子なり。限りなき院の御覺えの人に、かく撰者にも定まりにけり。嫉む人々多かりしかど、さはらむやは。この院のうへ好みよませ給ふ御歌のすがたは、前、藤大納言爲世の心地にはかはりてなむありける。御手もいとめでたく、むかしの行成大納言にもまさり給へるなど、時の人申しけり。やさしうも強うも、書かせおはしましけるとかや。

正和も二年になりぬ。今年御本意遂げなむと思さる。九月の暮つかた、賀茂に忍びて御籠のほど、をかしきさまの事ども侍りけり。近くさぶらふ女房ども、うちしほたれつ、晦日がたの空



のけしき、いともの哀なるに、御製、

長月や木の葉もいまだつれなきにしぐれぬ袖の色やかはらむ  
また、

我が身こそあらずなるとも秋の暮をしむ心はいつもかはらじ  
人々も、さと時雨わたり、袖のうへ、今日を限りの秋の名残よりも、忍びがたし。

大納言爲子、

一寸ちに暮れゆく秋を惜しまばやあらぬ名残を思ひそへずて  
又、誰にか、

いかに慕ひいかに惜しまむ年々の秋にはまさる秋のなごりを

十月十五日、伏見殿へ御幸あり。限りの旅と思せば、えもいはず引きつくるはる。庇の御車なり。  
上達部、殿上人、數しらず仕うまつり給ふ。

世の政なども、新院に譲り奉らせ給ひにしかば、御心しづかにのみ思されて、伏見殿がちにのみ  
ぞおはしましゝ程に、そこはかとなく御惱月日へて、文保元年九月三日かくれさせ給ひにき。伏見  
院と申しき。御母玄輝門院、永福門院などの御歎思ひやるべし。御門は御輕服の儀なれば、天、下

も色かはらず。この院、姫君あまたおはしましゝかど、院號は章義門院、延明門院ばかりにてお  
はします。二條富小路の昔の院のあとに、あづまより造りて奉る内裏、この頃、御移轉ありしな  
ど、いとくおもしろかりき。近き事は、皆人々御覽せしかば、なかくにてとどめつ。



## 第十六 秋のみ山

文保二年二月二十六日、御門おりぬさせ給ふ。春宮は、既に三十に満たせ給へば、待遠なりつるに、めでたく思さるべし。法皇都に出でさせ給ひて、世の中しろしめさる。龜山殿はさる事にて、近頃は、大覺寺のほとりに御堂たて、籠りおはしましたつ、いよゝ密教の深き心ばへをのみ、勤め學ばせ給へば、おのづからも、京に出でさせ給ふ事なく、又参りかよふ人も稀なるやうにて、神さびたりつるを、引きかへ、事しげき世に、行も懈怠し給へば、むづかしく思さる。三月二十九日御即位なり。行幸の當日に、左大將内經、花山院、右大將家定、行列を争ひて、隨身どもわしくの、しれば、御輿をおさへて、職事奏し下しなどすめり。左大將の御父君は、内實の大員と聞えし、嘉元の頃、俄にかくれ給ひにしかば、攝籙もしあへ給はざりしにより、今はたゞ人にてこそいまずべければとて、かく争ふとぞ聞えし。十月二十七日大嘗會、清暑堂の御神樂の拍子のために、綾小路の宰相有時といふ人、大内へまわり侍るとて、車より下りられける程に、いとすくよかなる田舎侍めくもの、太刀を抜きて走りよるまゝに、あやなく討ちてけり。さばかり立ちこみたる人

の中にて、いと珍かにあさまし。さて拍子俄にこと人うけたまはる。大事どもはて、後、尋ね沙汰ある程に、紙屋川の三位顯香といふ人の、この拍子をいどみて、我こそつとむべけれと思ひければ、かゝる事をせさせけり。道にすける程はやさしけれども、いとむくつけし。さてかの三位は流されぬ。

かくて今年はくれぬ。まことや、此度の春宮には、後二條院の一の御子定まり給ひぬれば、御門坊にておはしまし、時のまゝに、冷泉萬里小路殿の寢殿にうつり住ませ給へるに、二月の頃、軒の櫻盛にをかしき夕映を御覽じて、内に奉らせ給ふ。かの花につけて、

なれにける花は心やうつすらむおなじ軒端の春にあへども

御返しは、南殿の櫻にさしかへ給ふ。

花はげにおもひいづらむ春をへてあかぬいろ香にそめし心を

おりぬの御門は、御兄の本院と、ひとつ持明院殿に住ませ給ふ。もとより、御子のよしにておはしませば、まいて、ひとつ院の内にて、いさゝかも隔なく聞えさせ給ふ。いと思ふやうなる御有様なり。さるべき御中といへども、昔も今も、御腹などかはりぬるは、いかにぞや。そばくしき事もうちまじり、くせある習にこそあるを、この院の御間、まめやかに思ほしかはしたる、いとあり



難うめでたし。本院は、廣義門院の御腹の一の御子を、この度の坊にやと思されしかど、ひき過ぎぬれば、いと遙けかるべき世にこそと、さうくしく思さるべし。御歌合のついでなりしにや、

いろ／＼にみやこは春の時にあへどわがすむ山は花もひらけず

大覺寺殿には、ひきかへ、馬車の立ちこみたるを御覽じて、法皇よませ給ひける、

われすめばさびしくもなし山里も朝まつりごとおこたらずして

今のうへは、早うより、西園寺の入道大臣兼の末の御女、兼季の大納言の一つ御腹にももし給ふを、忍びてぬすみ御覽じて、わく方なき御おもひ、年にそへてやむごとなうおはしつれば、いつしか女御の宣旨など聞えしが、程もなく、やがて八月に后だちあれば、入道殿も、齡の末に、いとかしこくめでたしと思す。北山にまかで給へる頃、行幸ありき。八月十五日の夜、名をえたる月

も、殊に光を添へたり。所が折からおもしろく、めでたき事ども花やかなるに、御姉の永福門院より、今の後の御方へ、御消息聞え給ふ。

こよひしも雲井の月もひかりそふ秋のみ山をおもひこそやれ

御返しは、「まろ聞えむ」とのたまはせて、内のうへ、

むかし見し秋のみやまの月かけを思ひいでてや思ひやるらむ

御門の同じ御腹の前、齋宮も、皇后宮に立たせ給ふ。御母准后も、院號ありて、談天門院とぞ聞

ゆる。よろづ花やかに、めでたき事ども繁うきこゆ。内には萬里小路、大納言入道師重といひしが

女、大納言の典侍とて、いみじう時めく人あるを、堀川、春宮の權、大夫具親の君、いと忍びて見そ

められけるにや、かの女かき消ち失せぬとて、もとめ尋ねさせ給ふ。二三日こそあれ、ほどなく、その人とあらはれぬれば、うへいとめざましく憎しと思す。やむごとなき際にはあらねど、御おぼ

えの時なれば、きびしく咎めさせ給ひて、げに須磨の浦へも遣さまほしきまで思されけれども、さすがにて、官皆停めて、いみじう勘ぜさせ給へば、かしこまりて、岩倉の山庄に籠りぬ。花の盛

におもしろきをながめて、

うきことも花にはしばし忘れられてはるの心ぞむかしなりける

すけの君は歸りまゐれるを、つらしと思すものから、「うきにまぎれぬ戀しさ」とや、いよ／＼らう

たがらせ給ふを、さしもあらず、正身は、なほすき心ぞ絶えずありけむかし。

たえはつる契をひとり忘れぬもうきも我が身の心なりけり

とて、ひとりごたれける。末さまには、公泰の大納言、未だ若うおはせし頃、御心とゆるして給は

せければ、思ひかはして生まれし程に、かしこにて失せにき。御門の御母女院、十一月失せ給ひに

後、談天門院

後、談天門院

後、談天門院

後、談天門院

後、談天門院

後、談天門院

後、談天門院

後、談天門院

後、談天門院

後、談天門院

後、談天門院

後、談天門院

後、談天門院

後、談天門院

後、談天門院

後、談天門院

後、談天門院

後、談天門院



しかば、内のうへ御服たてまつる。天、下ひとつに染めわたして、葦簾垂とか、いとまがくしきものども懸け渡したるも、哀にいみじくぞ見ゆる。五節もとまりぬ。若き人々など、さうぐしく思へり。

當代もまた、敷島の道をもてなさせ給へば、いつしかと、勅撰の事おほせらる。前、藤大納言爲世後醍醐うけたまはる。玉葉の妬かりしふしも、今ぞ胸あきぬらむかし。この大納言の女、權大納言の君とて、坊の御時、限りなく思されたりし御腹に、一の御子、女三の御子、法親王など、あまたものし給ふ。かの大納言の君は、早うかくれにしかば、この頃三位おくらせ給ふ。贈従三位爲子とて、集にもやさしき歌多く侍るべし。さて大納言は、人々に歌すゝめて、玉津島の社に詣でられけり。大臣、上達部より始めて、歌よむと思へる限り、この大納言の風を傳へたるは、漏るゝものなし。子ども孫どもなど、いきほひ殊にひびきて下る。まづ住吉へまうで、逍遙しつゝのゝしりて、九月にぞ玉津島へ詣でける。歌どもの中に、大納言爲世、

今ぞ知るむかしにかへるわが道のまことを神も守りけりとは

かくて元應二年四月十九日、勅撰は奏せられけり。續千載といふなり。新後撰集とおなじ撰者の事なれば、多くはかの集にかはらざるべし。爲藤の中納言、父よりは少し思ふ所加へたるぬしにて、

今すこし、この度は心にくき様なりなどぞ、時の人々沙汰しける。

院にも内にも、朝政のひまゝには、御歌合のみしげう聞えし中に、元亨元年八月十五夜かによ、常より殊に月おもしろかりしに、うへ萩の戸に出でさせ給ひて、ことなる御遊なども、あらまほしげなる夜なれど、春日の御禰、假殿におはします頃にて、絲竹の調は折あしければ、例の只内々御歌合あるべしとて、侍従の中納言爲藤召されて、俄に題たてまつる。殿上にさぶらふ限り、左右同じほどの歌よみをえらせ給ふ。左、内のうへ、春宮、大夫公賢、左衛門、督公敏、侍従、中納言爲藤、中宮、權、大夫師賢、宰相惟繼、昭訓門院の春日女、右は藤大納言爲世、富小路、大納言實教、洞院、中納言季雄、公修、宰相實任、少將、内侍女、忠定、朝臣、爲冬、忠守などいふ醫師も、この道のすきものなりとて、召し加へらる。衛士のたく火も、月の名たてにやとて、安福殿へ渡らせ給ふ。忠定、中將、晝の御座の御佩刀をとりて参る。殿上のかみの戸を出でさせ給ひて、無名門より、右近の陣の前を過ぎさせ給へば、遣水に月のうづれる、いとおもしろし。安福殿の釣殿に床子たてて、東面におはします。上達部は、簀子の高欄に脊中おしあてつゝ、殿上人は、庭に候ひあへるも、いと艶なり。池の御船さしよせて、左右の講師隆資、爲冬のせらる。御酒などまゐるさまも、うるはしき事よりは、艶になまめかし。人々の歌、いたく氣色ばみて、とみにも奉らす。いと心も



となし。照る月なみも、曇なき池の鏡に、いはねどしるき秋のなかば、げにいと異なる空のけしきに、月も傾きぬ。明方ちかうなりにけり。うへの御製、

鐘の音もかたぶく月にかこたれてをしと思ふ夜は今宵なりけり

と講じあげたるほど、景陽の鐘も響をそへたる、折からいみじうなむ。いづれもけしうはあらぬ歌ども多く聞えしかど、御製の鐘の音に勝れるはなかりしにや。

かくて今年もまた暮れぬ。明くる春元享正月三日朝観の行幸あり。法皇は御弟の式部卿のみこの

御家、大炊御門京極井殿といふにぞおはします。内裏は二條萬里小路なれば、陣の中にて、大臣以下、徒歩より仕う奉らる。關白内經、太政大臣通雄、左大臣實泰、左大将兼季、右大将冬教、中宮

大夫實衡、中納言には具親、公敏、爲藤、顯實、經定、宰相には實任、冬定、公明、光忠、中將

は公泰、資朝、殿上人は頭、中將爲定、修理大夫冬方を始めて、残るはすくなし。この院も、池の

すまひ、山の木立、もとより由あるさまなるに、時ならぬ花の木ずゑさへ、造り添へられたれば、

春の盛にかはらず、咲きこぼれたるに、雪さへいみじく降りて、残る常磐木もなし。洲崎にたてる

鶴のけしきも、千代をこめたる霞の洞は、誠に、仙人の宮も、かくやと見えたり。

京極おもての棟門に、御輿をおさへて、院司事のよしを奏す。亂聲の後、中門に御輿をよす。中

門の下より出づる遣水に、ちひさく渡されたる反橋の左右に、兩大将冬教、兼季跪く。劍璽は、權亮宰相、

中將公泰つとめられしにや。關白、公卿の座の妻戸の御簾をもたげて、入り奉らせ給ふ。とばか

りありて、寢殿の母屋の御簾皆あげわたして、法皇出でさせ給へり。香染の御衣、同じ色の御袈裟

なり。御袈裟の箱を御そばにおかる。後座内のうへ、公卿の座より高欄をへ給ふ。御供に關白候ひ給

ふ。階の間より出で給ひて、廂に御座奉りたれば、御拜し給ふほど、西東の中門の廊に、上達部多

くうち重なりて、見やり奉る中に、内の御乳母の吉田の前、大納言定房、まみいたうしぐれたるぞ、

あはれに見ゆる。そのかみの事など思ひ出づるに、めでたき喜びの涙ならむかし。御拜をはりぬれ

ば、又もとの道を経給ひて、公卿の座に入らせ給ひぬ。法皇も内に入り給ひて、しばしありて、左

右の樂屋の調子と、のほりて後、又御門入らせ給ふ。法皇も同じ間の内に、御茵ばかりにておはし

ます。末の庇に、内より参れる女房ども候ふ。一の車に小大納言君師重、「うきも我が身の」と詠み

し人の妹なり。帥典侍資茂、さぬき、こいまとかや。二の左に新兵衛、中宮、内侍、後に准后と聞

えにき。しりには夏引、いはねを、三の車に少將、内侍、尾張、内侍、しりに青柳、今まゐりなど聞

ゆ。上達部、御前の座に著きて後、御臺まゐる。役送公泰、宰相中將、陪膳右大将兼季、その程、

舞人ひさまづく。地下の舞は目なれたる事なれど、折からにや、今日は殊に面もち足ぶみもめでた



く見ゆ。法皇の御覺えにて、壽王といふ人、松殿のなにがしとかやが子なり。落躑など舞ふと聞きしかど、夜も更け、雪もことにかきくらしして、何のあやめも見えざりき。その後、御前の御あそび始まる。頭大夫冬方、御箱の蓋に御笛入れて持ちてまゐる。關白とりて御前に參らせたまふ。右大將も笛、中宮、大夫琵琶、大宮、大納言笙、春宮、大夫琴、右、宰相、中將は和琴、光忠、宰相筆簾、兼高も吹きしにや。拍子は左大臣、すゑは冬忠の宰相なり。更けゆくまゝに、うへの御笛の音すみのぼりて、いみじくさえたり。左の大臣の安名尊、伊勢海、限りなくめでたく聞ゆ。事どもはてぬれば、御贈物まゐる。錦の袋に入れたる御笛、箱の蓋にすゑらる。左大臣とりつぎて、關白に奉る。御前に御覽せさせて、冬方を召して賜はず。次に唐の赤地の錦の袋に、御琵琶入れて參る。その後、御馬、殿上人口をとりて、御前にひき出でたり。ほのくくと明るる程にぞ、歸らせ給ひぬる。

法皇は、やゝもすれば、大覺寺殿にのみ籠らせおはします。人々世の中の事ども奏しにまゐり集ふ。今は一すぢに、御行にのみ御心入れ給へるに、いとうるさく思せば、その夏の頃、定房の大納言あづまへ遣さる。御門に天の下の事譲り申さむの御消息なるべし。大方はいとあさましうなりはてたる世にこそあめれ。かばかりの事は、父御門の御心に、いとやすく任せぬべきものと、

めざましけれど、昨日今日始まりたるにもあらず。承久よりこなたは、かくのみなりもて來にければなめり。内に近く候ふ上達部などの、なま腹ぎたなき、わが思ふ事のとどこほりなどするを、なほ法皇をうれはしげに思ひ奉りて、この事いかで東よりゆるし申すわざもがなと、祈などをさへぞしける。かくて大納言ほどなく歸りのぼりぬ。御心のまゝなるべく奏したりとて、院の文殿、議定所ひやうぢやうしやうにうつされ、評定衆ひやうぢやうしやうなど、少々かはるもあり。さて世をしたゝめさせ給ふ事、いとかしこう明かにおはしませば、昔に恥ぢず、いとめでたし。才もいとはしたなうものし給へば、萬の事くもりなかなめり。三史五經の御論議などもひまなし。

六月のころ、中殿の作文せさせ給ふ。題は式部、大輔藤範奉る。「久しかるべきは賢人の徳」とかや聞えしにや。女のまねぶべきことならねば漏しつ。上達部、殿上人三十餘人まゐれり。關白殿實ばかり直衣にて、御几帳みきやうのうしろに候はせ給ふ。うへは御引直衣、御琵琶みびば上ひかせ給ふ。右大將實琵琶、春宮、大夫賢筆、權大納言房笙、權中納言忠和琴、左、宰相、中將泰笙、右衛門、督家笛、右、宰相、中將光筆簾、拍子は例の左の大臣實、すゑは冬定なりしにや。うへの御琵琶の音、いひ知らずめでたし。右大將は何にかあらむ、心とけても掻き立てられざりき。御遊はて、の後、文臺ぶんたいめさる。藏人内記俊基、人々の文をとりあつめて、一度に文臺の上におく。披講ひかうの終るほどに、短夜も



ほのくくと明けはてぬ。御製を、左の大臣實かへすく誦誦じて、うるはしく朗詠朗詠にせらる。聲いと  
うつくし。折ふし、郭公郭公の一聲一聲なりの捨て、過ぎたるは、いみじく艶艶なり。かやうのまことしき事  
は、かねて人々も心づかひすれば、過あやまりなかるべし。時に臨みて、俄かたに難かたき題を賜たまはせて、内々唐  
詩うたをつくらせ、歌をよませて、賢かしこく愚おろかなると御覽みじわくに、いと幸かちい事多く、心ゆるびなき世な  
り。

その七月七日乞巧きこう奠でん、いつの年よりも御心とどめて、かねてより、人々に歌ども召され、物の音  
ども、試みさせ給ふ。その夜は、例の玄象げんじやうひかせ給ふ。人人の所作しよさ、ありし作文さくもんにかはらず。笛、  
箏びりりき築きなどは、殿上人ども、なる板のほどに候ひて仕うまつる。中宮ちゆうぐうも、うへの御局みまろに參まうのぼらせ  
給ふ。御簾みすの内にも、琴、琵琶あまたありき。播磨はりまの守永定しゆえいの女にすめ、今は左大臣さだの北きた方にて、三位  
殿といふも、箏さう弾ひかれけり。宮の御方の播磨はりまの内侍も、おなじく琴弾ひきけるとかや。琵琶は權大納  
言ごんの三位殿ごん師藤大しとうだい、納言女ごんごん、いみじき上手じやうずにおはすれば、めでたうおもしろし。蘇香そかう、萬秋樂まんしゆらく、のこる手な  
く、いくかへりとなくつくされたり。あけがたは、身にしむばかり、若き人々めであへり。さらで  
だに、秋の初風は、げにそゞろ寒さむきならひを、理ことわりにや。御遊みあそびはて、文臺ぶんたいめさる。このたびは、和  
歌の披講ひかうなれば、その道の人々、藤大納言ふじごんごん爲世たむけ、子ども孫まごども引きつれてさぶらへば、うへの御  
後ご座ざ

製

笛竹のこゑも雲井にきこゆらし今宵こんしゆうたむくる秋のしらべは  
すむながるめりしかど、いづれも、只、天の川、鵲かづなの橋より外は、珍めづしきふしは聞えず。まこと  
や、實教の大納言じつきやうなりしにや、  
おなじくは空まで送れたきものゝにほひをさそふ庭のあき風  
げにえならぬ名香めいかうの香かどもぞ、めでたくかうばしかりし。

花も紅葉も散りはて、雪つもる日數の程なさに、又年かはりて、正中元年といふ。三月しやうごの二十  
日あまり、石清水の社に行幸し給ふ。上達部、殿上人、いみじき清らをつくせり。關白殿は御車ごぐるまな  
り。右大將みぎだいしやう實實、松がさねの下がさね、鶴の丸をおる。蘇芳すほうのかたもんもんの衣きぬ、左大將ひだりだいしやう經經、櫻萌黃さくらもへいの二  
重織物の御下がさね、櫻に蝶をいろくにおる。花山吹のうへの袴、紅のうちたる御衣ごえ、人よりこ  
とにめでたく見え給ふ。御かたちも、にほひやかに氣高きさまして、誠まことに一ひとの人とは、かゝるをこ  
そは聞えめと、飽かぬ事なく見え給ふ。土御門の中納言顯實あきみ、花櫻の下がさねなりき。花山院、中  
納言經定きやうじやうなどぞ、上藤じやうとうの若わかき上達部にて、いかにも珍めづしからむと、世の人よも思へりしかど、家のや  
うとかや、何とかやとて、ただいつものまゝなり。公泰、宰相、中將、劍璽けんじの役つとめらる。櫻萌黃



のうへのはかま、樺櫻の下がさね、山吹の浮織物のきぬ、紅のうちたるひとへを重ねられたり。白くまろく肥えたる人の、眉いと太くて、綏のはつれ、あな清げと、頼もしくぞ見えられし。頭、亮藤房、樺櫻の下がさね、蘇芳の浮織物のきぬ、弟の職事季房も、山吹の下がさね、くれなるのきぬ、衛府のすけどもは、うちこみたれば見もわかす。別當左兵衛督資朝、はしり下部とかやいふもの八人に、地は、みな、銀を延べたるにやと見ゆるに、鶴の丸を、黄にみがきたる、好ましう清げなり。

舞人にも、よき家の子どもを撰び整へられたり。一の左に、中ノ院の前の大納言通顯の子通冬、少將、まだいとちひさきに、童なども、おなじ程なるを、好み整へて、いと清らにしみじうしたてて、秦の久俊といふ御隨身をぞ具せられたる。右に久我の少將通宣、いたく過したる程にて、髯がちに、ねび給へるかたちして、ちひさきに立ち竝ばれたる、いとたとしへなくぞ見えし。それよりつきくは、むづかしさに忘れぬ。大將の隨身もこそ、昔の事は、げには見ねば知らず。いとゆしく、誠に花を折るとはこれにやと、めでたう面白かりし。左大將殿の隨身は赤地の錦の、色も紋も目なれぬさまに、このましきを、情なきまでさながらだみて、ませに、山吹を白がねにてうちものにして、ひしとつけたり。花の色、かさなりなどまで、こまかに美し。露を水晶の玉にておきた

る、朝日に輝きて、すべていみじうぞ見ゆる。西園寺の隨身も、おなじ錦なれど、松をむすびて、鶴のまろを白と黄とにうちてつけたる、山吹よりは、にほひなく見ゆ。さまざまの神寶、神馬、幣帛など、夜もすがらのしり明して、又の日の暮つかた歸らせ給ひぬ。

おなじ四月十七日、賀茂の社に行幸なる。上達部など、多くはさきに同じ。衣がへの下襲ども、けぢめなく涼しげなり。別當の下部、この度は十二人、褐色に、雉の尾を白ううち違へてつけたる、これも掲焉に、このましげなり。明くる日は祭なれば、神館の方、うち續き、花やかにおもしろし。今日の使は、徳大寺、中將公清なり。春宮、大夫公賢の躰にておはすればにや、左大臣の大炊御門富小路の御家よりぞ、出でた、れける。人がらといひ、よろづめでたく見ゆ。萌黄の下がさね、御家の紋の木瓜をいろくゝに織りたりしにや、近頃の使には似ず、いとみじくきらめき給へり。中宮の使は、亮藤房なり。この頃、時にあひたるものなれば、いと清げに、劣らぬさまなり。その二十七日に、任大臣の節會おこなはる。左大將經忠右大臣にならせ給ふ。内大臣冬教左にうつり給へば、右大將實衡内大臣になさる。又の日やがて、右大臣殿大饗行ひ給へば、尊者には内大臣参りたまふ。近衛殿、この頃は、御惱がちにてのみ臥し給へれど、今日の御悦に、珍しく出でゐさせ給へり。法皇は、今は大覺寺殿にのみおはしませば、大炊御門の式部卿のみこの御家を、内



大臣殿申しうけて、おなじ日、大饗し給ふ。尊者には右の大臣、やがて、我が御家の大饗はつるまに、ひきつれて渡り給へり。主人も客人も、大將かね給へれば、隨身ども、えならず經營して、互にけしきとりかはしたる、いとおもしろし。あるじのおとど琵琶、右衛門、督兼高筆、隆資朝臣、室町、三位、中將公春琴、教宗朝臣、有頼、宰相拍子とりて、遊びくらし給ふ。御前の物どもなど、常の作法にことを添へて、こまかに清らなり。

その後いくほどなく、右大臣殿の御父君前、關白殿家平、御惱重くなり給ひて、御髪おろさる。俄の事なれば、殿の内の人々いみじう思ひ騒ぎまどへり。この殿、若くおはします頃は、女にもむつまじくおはしまして、この右大臣殿なども出で給ひける。中頃よりは、男のみ御傍に臥せ給ひて、法師の兒のやうに語らひ給ひつゝ、ひとりわたりづつ、いと花やかに時めかし給ふ事、けしからざりき。左兵衛、督忠朝といふ人も、限りなく御おぼえにて、七八年がほど、いとめでたかりし。時すぎてその後は、成定といふ諸大名いみじかりき。この頃は又、隱岐守頼基といふもの、童なりし程より、いたく纏はし給ひて、昨日今日までの御召人なれば、御髪おろすにも、やがて御供仕うまつりけり。病重らせ給ふほど、夜晝御傍放たすつかはせ給ふ。既に限りになり給へる時、この入道も、御後にさぶらふに、寄りかゝりながら、きと御覽じ返して、あはれ、諸共にいでゆく

道ならば、うれしかりなむ」と宣ひもはてぬに、御息とまりぬ。右大臣殿も、御前にさぶらはせ給ふ。かくいみじき御氣色にてはて給ひぬるを、心うしと思されけり。さてその後、かの頼基入道も病づきて、あと枕も知らず、まどひながら、常は人に畏まるけしきにて、衣ひきかけなどしつゝ、「やがて参り侍る」とひとりごちつゝ、程なく失せぬ。粟田の關白のかくれ給ひにし後、「夢見ず」と歎きしもの、心地ぞする。故殿のさばかり思されたりしかば、めしとりたるなめりとぞ、いみじがりあへりし。



第十七 春のわかれ

四月つづきの末つ方より、法皇御惱重くならせ給へば、天下のさわぎ思ひやるべし。御門もいみじく思し歎なげき、御修法みしほども、いとこちたく、またくはじめ加へさせ給へど、驗しるしもなく、日々におもらせ給へば、夜晝あつさとなく、いかにくくとぶらひ奉らせ給ふ。若き上達部などは、直衣ちしほはきに柏夾かしはさみして、夜中あつさとなく、遙さげき嵯峨野さかを、寮かの御馬みまにて、馳かせありき給ふめり。今はむげに頼たみなきよし聞ゆれば、大覺寺殿へ行幸ありし事おぼし出づ。萬よろづの事ども聞えさせ給ふ。うへの一つ御腹の二品法親王性圓と聞ゆるを、いと愛かしきものに思ひ聞えさせ給ひて、この大覺寺後醍醐にそこの御莊みさき、御牧みまきなどを寄せ給ふ。法のりのあるじとしておはしますべく、思しおきてけり。さやうの事など、見給へざらむあと、後うしろめたからぬさまなどぞ、聞えさせ給ひける。

その後、御孫うまごの春宮行啓あり。世を知ろしめさむ時の御心づかひなど、今すこし、細こまやかに聞えしらせ給ふ。宮は、先帝せんたいの御かはりにも、いかで心のかぎり仕うまつらむと、あらまし思おもされつるに、飽あかず口惜くしやくしうて、いたうしほたれさせ給ふ。御門の御なからひ、うはべはいとよけれども、

まめやかならぬを、いと心苦しと思さるれど、言ことに出で給ふべきならねば、只、大方おほがたにつけて、世にあるべき事ども、またこの頃、すこし世に恨あるやうなる人々の、我が御心には、あはれと思おもさるゝなど數多あまたあるをぞ、御心のまゝなる世にもなりなむ時は、必ず御用意あるべくなど聞え給ひける。中御門の大納言經繼、六條の中納言有忠、右衛門、督教定、左衛門、佐俊顯など聞えし人々の事にやありけむ。さてその夜はとまり給へるも知ろしめさで、夜うち更けて、少し驚かせ給ひて、邦鳥やまどり春宮はいつ歸り給ひぬるぞ」と宣ふに、うち聲こゑづくりて、近く参り給へれば、「未だおはしましけるな」とて、いとらうたしと思されたる御氣色みけしきあはれなり。大方のけしき、院いんの内のかいしめりたる有様など、よろづ思おもしめぐらすに、いと悲しきこと多かれば、宮うち泣き給ひぬ。心細こまういみじとのみ思さるゝに、正中元年六月二十五日、終はつしほにかくれさせ給ひぬ。御年五十八にぞならせ給ひける。後宇多院と申すなるべし。御門、又、御服みくさたてまつる。明暮あけくれ、ねむころに孝けいじ奉り給ふさま、いとかたじけなし。御女の皇后宮と聞えし、今は達智門院と申すも、まいて、一所ところのみ頼み聞えさせ給へるに、心細こまういみじと、思し歎なげく事かぎりなし。むかしの内侍のかむの殿、近頃院號ありて、萬秋門院と聞ゆるも、故院こいんの御蔭かげにてのみ過すし給へれば、より所ところなくあはれげなり。御四十九日かは、八月十日あまりの程なれば、世の氣色、何となくあはれ多かるに、女院宮たちの御心のうち



ども、朝霧よりも晴間なし。十五夜の月さへかき曇れるに、故院の御位の時に、宰相、典侍とてさぶらひしは、雅有の宰相の女なり。その世のふるき友なれば、同じ心ならむと、思しやるもむつまじくて、萬秋門院より宣ひ遣す。

仰きみし月もかくるゝ秋なればことわり知れと曇る空かないとあはれに悲しと見奉りて、御かへし、宰相、典侍、

ひかりなき世はことわりの秋の月涙そへてやなほくもるらむ

永嘉門院、西華門院など、いづれも思し歎く人々多かり。春宮も、いと戀しく、哀とのみ思ひ聞え給ふまゝに、御法事をぞ、まめやかに、勤めさせ給ひける。大覺寺にては、性圓法親王とりもちて行はせ給ふ。御門、春宮の御法事は、龜山殿の大多勝院にてつとめらる。

あはれ〜といひつゝも、過ぎやすき月日のみうつりかはりて、年もかへりぬ。一昨年ばかりより、又重ねて撰集の事仰せられしを、爲世の大納言二度になりぬればにや、爲藤の中納言に譲りしを、いく程なく、かの中納言惱みて失せぬ。いとほしうあはれなり。故爲道朝臣の失せにし、只年月ふれど、絶えぬ恨なるに、又かくとり重ねたる歎、大納言の心のうち、いはむ方なし。春宮より、しば〜とぶらはせ給ふ御消息のついでに、

おくれゐる鶴の心もいかばかり先だつ和歌のうらみなるらむ  
御かへし、大納言爲世、

思へたゞ和歌の浦にはおくれゐて老いたるたづの歎くこゝろを

世に歌よむと思しき人の、あはれがり歎かぬはなし。せめて、勅撰のこと撰びはつるまで、などはかとぞ、一族のなげき、いとほしげなり。故爲道の中將の二郎爲定といふを、故中納言、とりわき子にして、何事もいひつけしかば、撰歌の事もうけつぎて、沙汰すべきなどぞ聞ゆる。大納言は末の子爲冬の少將といふを、いたくらうたがりて、この紛に、引きや越さましと思へる氣色ありとて爲定も恨み歎きて、山伏姿に出でたちて、修行に出で失せぬるなど、いひ沙汰すれば、人々いとほしう、あはれになどもあつかへど、さすが求め出して、もとのやうに穩しく定まりぬとなむ。

その頃、九月ばかり、まだしのゝめの程に、世の中いみじく騒ぎのゝしる。何事にかと聞けば、美濃國の兵にて、土岐の十郎とかや、また多治見の藏人などいふ者ども、忍びのぼりて、四條わたりに立ち宿りたる事ありて、人に隠れてをりけるを、早う又告げ知らする者ありければ、俄にその所へ六波羅よりおし寄せて、搦めとるなりけり。あらはれぬと思ひけむ、かの者共は、やがて腹切りつ。又別當資朝、藏人内記俊基、同じやうに武家へとられて、きびしく尋ね問ひ、まもりさ



わぐ。事のおこりは、御門世をみだり給はむとて、かの武士どもを召したるなりとぞ、いひあつかふめる。さて、その宣旨後醍醐なしたる人々として、この二人をも東へ下して、いましむべしとぞ聞ゆる。いかさまなる事の出で来べきにかと、いと恐しくむづかし。故院後宇多おはしまし、程は、世ものどかにめでたかりしを、いつしか、かやうの事ども出で来ぬるよ」と、人の口安からざるべし。正應にも、浅原といひしさわぎは、後嵯峨院の御處分を、東より、ひき違へし御恨とこそは聞えしか。今もその御憤いぎどほりの名残なるべし。過ぎにし頃、資朝も山伏のまねびして、柿の衣かきに綾蘭笠といふもの著て、東の方へ、忍びて下れりしは、少しは怪あやしかりし事なり。はやうかゝる事どもにつけて、あなたさまにも、宣旨を受くるものゝありけるなめり。俊基も、紀伊、國へ湯浴みに下るなどいひなして、田舎歩ひなかりき繁しげかりしも、今ぞ皆人思ひあはせける。

さるまゝには、いひ知らず聞ゆる事どもあれば、まだきに、いと口惜しう思されて、この事を、まづ穩たしくやめむと思せば、かの正應にありしやうなる、誓の御消息をつかはす。宣房の中納言御使にて東に下る。大方、ふるき御世より仕へきて、年もたけたる上、この頃は、天の下に、いさぎよくうべしき人に思はれたる頃なれば、この事、更に御門の知ろし召さぬよしなど、けざやかにいひなすに、荒きえびすどもの心にも、いと忝かたじけなき事となごみて、無異なるべく奏しけり。この

御使の賞にや、宣房、大納言になされぬ。いとみじき幸なり。親は三位ばかりにて入道してき。子どもなどさへ、いと清げにて、あまたあめり。されば、公は知ろしめされぬにても、かの人人は通のびるべき方なしとて、別當は佐渡の國へ流されぬ。俊基は、いかにして遁れぬるにか、都へかへりぬれど、ありしやうには出で仕へず、籠り居たるよしなり。かやうにて、事なく鎮しづまりぬれば、いとめでたけれど、うへの御心のうちは、なほ安からず、いかならむ時とのみ、思ほしわたるべし。

月日程なくうつりゆきて、嘉暦元年になりぬ。三月の始つ方より、春宮例ならずおはしまして、日々におもらせ給ふ。さまゝの御修法どもはじめ、御祈、なにやかやと、伊勢にも御使たてまつらせ給へど、かひなくて、三月二十日、遂にいとあさましくならせ給ひぬ。宮の内、火を消ちたる心地して、惑まひあへり。御乳母の對の君といふ人、夜晝御傍かたはらさらす候ひなれたるに、いみじき心まどひ、誠にをさめがたげなり。限りと見え給ふ御顔にさしよりて、對たい面、かくのこりなき身を御覽じ捨て、は、えおはしましやらじ。今一度、御聲なりとも聞かせ給ひて、いづ方へも、御供に率ひておはしましてよ」と、聲も惜しませず泣き入り給へるさま、いとあはれなり。すべて、宮の内とよみ悲しぶさま、いはむ方なし。永嘉門院は、御子もおはしまさねば、年月、この宮を、故院聞えつけ



させ給ひしかば、今も一つ院におはします。御息所にも、やがて故院の姫宮を、女院の御傍にかしづき聞え給ひしを、あはせ奉り給へれば、又なきさまに思しかはして、過させ給へるなど、いみじう沈み入り給へり。

さてあるべきならねば、常の行啓のさまにて、先帝のおはしまし、北白川殿へぞ、入れ奉らせ給ひぬる。土用のほどにて、暫し彼處におはしますさへ、いと悲し。院號などの沙汰もあるべくこそ。されど、おはしまし、時に、その事はよしなかるべく、仰せられおきしかば、内よりも、聞し召しすぐしけり。晝の御座の粧とりこぼち、火たき屋などかき拂ふ程、猶現とも覺えず。堀川の女御の、「見えしおもひの」など宣ひけむは、この世ながら、御心との御あかれなれば、羨ましくさへ覺ゆ。さしあたりての哀はさしおきて、先帝の御位ながら失せ給へりしだにあるを、又かく、半なるやうにて、あさましければ、世の人の思はむ事も心憂く、一方ならぬ歎に添へたる愁、いはむ方なし。大方我が身をかぎりはてぬると、思ふ人のみ多かりき。

有忠の中納言、先坊の御使にて、東に下りにし、いつしかと、思ふさまならむ事をのみ待ち聞えつる、踐祚の御使の都に参らむと、同じやうに上らむとて、未だ彼處にもせられつるに、かくあやなき事の出で來ぬれば、いみじとも更なり。三月三十日、やがて、かしこにて頭おろす。心のう

ちさこそはと悲し。

おほかたの春のわかれの外に又我が世つきぬる今日の暮かな

都にも前の大納言經繼、四條三位隆久、山井の少將敦季、五辻の少將ながとし、公風の少將、左衛門佐俊顯など、皆頭おろしぬ。女房には、御息所の御方、對の君、帥の君、兵衛督、内侍の君など、すべて男女三十餘人、さまかはりてけり。やむごとなき君の御時も、かくばかりの事は、いとありがたきを、佛などの現れ給ひて、殊更に、迷ひふかき衆生を、導き給ふかともまで見えたり。御本性のいとなごやかにおはしまし、かば、近う仕うまつる限りの人は、年頃の御名残を思ふも、いと忍びがたき上、大方の世にもさしはなたれて、身を益なきものに思ひ捨つる類など、さまざまにつけて、厭ひ背くなるべし。若宮三所、姫宮などもおはしましけり。御息所の御腹にはあらねど、いづれをも、今は昔の御形見と、あはれに見奉らせ給ふ。四月の末つかた、夏木立心よげに茂りわたれるも、羨ましくながめさせ給ふ。暁がた郭公の鳴きわたるも、「いかに知りてか」と御涙の催しなり。

もろともに聞かましものをほとゝぎす枕ならべし昔なりせば

まことや、例のさきに聞ゆべき事を、時違へ侍りにけり。兵衛督爲定、故中納言のあとをうけ



て撰びつる撰集の事、正中二年十二月の頃、まづ四季を奏するよし聞えし残、この程世にひろまれ  
 る、いとおもしろし。御門ことの外にめでさせ給ひて、續後拾遺とぞいふなる。中宮、大夫師賢う  
 けたまはりて、この度の集のいみじきよし、さまざま仰せ遣したるに、御返しに、爲定、  
 今ぞ知るあつむる玉のかすく身にをてらすべき光ありとは  
 御返し、内の御製、

かすく集むる玉のくもらねばこれもわが世の光とぞなる

この大夫は、もとより中よきどちにて、常に消息などつかはすに、かく世にほめらるゝを、いとよ  
 しと思ひて、兵衛、督のもとへいひやる。

和歌の浦のなみも昔にかへりぬと人よりさきに聞くぞ嬉しき

かへし、

和歌の浦や昔にかへるなみぞともかよふ心にまづぞ聞くらむ

この爲定の同胞、中宮に、宣旨にてさぶらふも、うへ例の時めかし給ひて、若宮いでものし給へ  
 り。その宮の御めのは、師賢の大納言うけたまはりて、いみじうかしづき奉らる。又宮の内侍の  
 御腹にも、次々、いとあまたおはします。一の御子は藤大納言の御腹、吉田の大納言定房の家にわ

たらせ給ふ。一二の御子も、いときらくしうて、源大納言親房の御あづかりなり。かくさまざまに  
 おはしますを、この度、いかで坊にと思しつれど、かねてより、催し仰せられし事なれば、東より  
 人まゐりて、本院の一の宮を定め申しつ。いとけやく聞きしめせど、いかゞはせむにて、七月二十  
 四日に、皇太子の節會行はる。陣の座より引きわたして、持明院殿に人々まゐる。院の殿上にて祿  
 など賜はる。常の事なれど、俄にいとめでたし。

八月になりて、陽徳門院の土御門東の洞院殿へ行啓はじめあり。先坊の宮は鷹司なれば、間近き  
 ほどに、世の音なひ聞しめす入道の宮、女院などの御心のうち、今更にいと悲し。本院、新院、一  
 つ御車にたてまつりて、先立ちて入らせ給ふ。行啓は、東の洞院おもての棟門に、御車とどめて、  
 中門まで筵道をしきて、歩み入らせ給ふ。御鬢頼結ひて、いと幼に美しげなり。十四ばかりにやお  
 はしますらむ。宮づかさども、院の殿上人など、多く仕うまつれり。花ひらけたる心地どもすべ  
 し。あはれなる世の習なりかし。

かくて、今年も暮れぬれば、嘉暦も二年になりぬ。一の宮御冠し給ひて、中務、卿尊良親王と  
 聞ゆ。去年より、内に御宿直所して、わたらせ給ふ。陸月の十六日の節會に、珍しく出で給ふ。御  
 門も、徳治の頃、帥にて、七日の節に出でさせ給へりし例、思し出づるにや、大方、ふるくは、皆



さこそありけれど、近頃は、いたくかやうにはなかりつるを、御子たち、御冠かうぶりののちは、いづれも、昔おぼえて、さるべきをりく、出で仕へさせ給ふめり。今日の節會は、常より殊に、ひきつくるはるゝなるべし。みこは、蘇芳すほうのうへのきぬ奉れり。左大臣冬教、右大臣經忠、内大臣基嗣、右大將公賢、權大納言顯實、藤中納言實任、別當光經、三條、中納言實忠、左衛門、督公泰、權中納言藤房、宰相には惟繼、親賢、爲定、冬信、國資などまゐれり。二の宮は、西園寺、宰相中將實俊の女の御腹なり。帥そちの御子世良よなの親王みこときこゆ。昭慶門院とりわき養ひ奉らせ給ふ。この宮は、御めのと源大納言親房なり。それもうちく、うへの御衣かきにて、御門なでん南殿へ出でさせ給へば、御供にさぶらはせ給ふ。又常盤井の式部卿、宮は、龜山院の御子なれば、當代なごころと、いと懇ねむろなる御中にて、この御子たちと同じやうに、常はうちつれ、御宿直ととのるなどせさせ給ふ。今日も御まゐりありて、御子たち歩み續かせ給へる、いとおもしろし。若き女房などは、心づかひことなる頃ならむかし。

二月ふたつきになれば、やうく、故宮こきうの御一めぐりの事ども、永嘉門院には、いとなませ給ふも、あはれ盡つきせず。鷹司たかすの大殿おほのみやも失せ給ひぬ。この頃の世には、いと重くやむごとなくものし給へるに、いと惜あたらし。北政所きたのまんどうは、中院なかつの内うちの大臣通重とむしげの御同胞みらからなり。それもさまかはり給ひぬ。近頃、

よき人々多く失せ給ひぬるこそ口惜しけれ。



第十八 むら時雨

竹の園生はしげけれど、秋の宮の御腹には、たゞ一品内親王ばかりものし給ふを、いと飽かず思ほしわたるに、この頃、珍しき御惱のよし聞ゆれば、いとめでたくあらまほしき御事なるべきにやと、うへもいみじく思されて、かねてより、御修法どもこちたく始めらる。まして、その程近くならせ給ひぬれば、式部卿の宮の常磐井殿へ出でさせ給ひて、うへも、二三日へだてず通ひおはします。陣の内なれば、上達部、殿上人、夜晝となく、袴のそばとりて参りちがふ。御兄の兼季の大臣も、絶えず候ひ給ふ。いみじき世のさわぎなり。故入道殿、今しばしおはせましかばと、思し出づる人々多かり。山、三井寺、山科寺、仁和寺、すべて、大法、祕法、祭、破、かすを盡しての、しるさま、いと頼もし。七佛薬師の法は、青蓮院、二品法親王慈道勤めさせ給ふ。金剛童子、常住院の道昭僧正、如意輪法、道意僧正、五壇の御修法の中壇は、座主の法親王行はせたまふ。如法佛眼は、昭訓門院の御志にて、慈勝僧正うけたまはり行ふ。一字金輪は浄経僧正、如法尊勝は桓守僧正、愛染王は賢助僧正、六字法は聖尋僧正、准胝法は達智門院の御沙汰にて、信耀僧正つとめら

る。その外、猶本坊にて、さまざまの法ども行はせらる。六月ばかりいみじう暑き程に、壇ども軒をきしりて、護摩の煙みち／＼たるさま、いとおどろ／＼しきまで烟たし。社々の神馬はさらにもいはず、醫師、陰陽師、巫ども立ちさわぎ、世のひびくさま、めでたくゆゝしきにも、もし皇子にておはしまさざらむ折、いかにと思ふだに胸つぶるゝに、いかなる御事にか、あやしうさるべき程もうち過ぎゆけば、なほ暫しはさこそあれなど、待ち聞ゆれど、更につれなくて十七、八、廿、卅月にも餘らせ給ふまで、ともかくもおはしまさねば、今は虚事のやうにぞなりぬる。大かた、上下の人の心ち、あさましともいふべき際ならず。御産屋の儀式、あるべき事どもなど、こちたきまで催しおかれ、よろしき家の子ども、二親うち具したる選ばれしかど、ここの月頃には、あるは服になり、そのぬしも病して頭おろしなど、すべてよろづあへなく、珍かなれば、いはむ方なし。前坊のはじめつ方、中、院の内の大内通重の御女まわり給ひて、十八月にて若宮生れ給へりしかど、やがて、御子も、母御息所も失せ給ひにしかば、いみじうあさましき事にいひさわぎし程に、又その後、このとまり給へる入道の宮参り給へりしも、十七月ばかりにや、たゞならずおはしまし、既に御氣色ありとて、宮の中たちさわぐ程に、たゞ、ゆく／＼と水のみ出でさせ給ひて、昔の弘徽殿の女御の、太秦にてありけむやうにて止みき。をりふし、賀茂の祭の頃にて、春宮の使もとゞ



まりなどして、さやうのをりく、人の口さがなさ、せめても、先坊の御かたさまの事を、貶めさ  
まにいひなやまし、人々も、この頃ぞ、又かくまさる例もありけりと、はしたなく思ひあはせけ  
る。さのみやは、さてしもおはしますべきならねば、内へかへり入らせ給ふにも、いとあさましう  
珍かなる事を思し歎くべし。御修法どもも、ありしばかりこそなけれど、猶少しづつは絶えず、い  
つを限りにかと見えたり。その頃、左の大臣實泰も失せ給ひぬ。世の中いみじく歎きあへり。

かくて元徳元年にもなりぬ。今年はいかなるにか、咳病はやりて、人多く失せ給ふ中に、伏見  
院の御母玄輝門院、前坊の御母代の永嘉門院、近衛大北政所など、やむごとなき限り、うち續き  
かくれ給ひぬれば、こゝかしこの御法事しげくて、いと哀なり。かやうの事どもにて、今年もまた  
暮れぬ。

明くる春の頃、内には、中殿にて、和歌の披講あり。序は源大納言親房かゝれけり。かねてよ  
り、いみじう書かせ給へば、人々心づかひすべし。題は「花契三萬春」とぞ聞えし。

御製、

時しらす花もときはのいろに咲けわがこゝへのよろづ代の春

中務卿尊良親王、

のどかなる雲井の花のいろにこそよろづ代ふべき春は見えけれ

帥御子世良、

百敷のみかきのさくらさきにけりよろづ代までの春のかざしに

つぎく多かれども、むつかし。

三月の頃、春日の社に行幸し給ふ。例のいみじき見物なれば、棧敷ども、えもいはず挑み盡した  
り。その後、日吉の社にも参らせ給ひき。今年も、人おほく俄病して死ぬる中に、帥の御子重くな  
やませ給ひて、いとあへなく失せ給ひぬ。内の方へ思し歎く事疎ならず。一の御子よりも、御才な  
どもいとかしこく、よろづ警策にもし給へれば、今より、記録所へも、御供に出でさせ給ふ。議  
定などいふ事にも、参り給ふべしと聞えつるに、いとあさまし。御めとの源大納言親房、我が世  
盡きぬる心ちして、とりあへず頭おろしぬ。この人のかく世を捨てぬるを、親王の御事にうちそへ  
て、かたぐいみじく、御門も口惜しくおぼし歎く。世にもいと惜しく惜しみあへり。

おなじ年の冬の頃、平野北野兩社に、一度に行幸なり。勸修寺の殿原、昔より、近衛司などには  
ならぬ事にてありつれど、内の御めのと吉田、大納言定房、過ぎにしころ従一位して、いと珍しく  
めでたければ、今は上臈と等しきにや、稚き子の宗房といふも、少將になさる。色許りなどして、



この平野の行幸の舞人まひびとにまゐる。土御門、大納言顯實の子に、通房の中將、堀川の大納言具親の子の具雅の中將など、皆よき君だち舞人にさゝれて、いづれも清らに美しう出でたちて、仕うまつられたり。その外は、くだくしければ、例のとどめつ。かやうのめでたき紛まぎれにて過ぎもてゆく。

又の年の春三月やまひの始つかた、花御覽はなごらんじに、北山に行幸なる。常よりも殊におもしろかるべい度たぎなれば、かの殿にも、心づかひし給ふ。まづ中宮行啓、またの日行幸、前の右の大臣兼季まゐり給ひて、樂所がくところの事などおきて宣のたまふ。康保の花の宴うたげのためしなど聞えしにや。北殿きたどのの棧敷せきぢにて、うちく試樂しがくめきて、家房朝臣舞はせらる。御簾みすの内に大納言二位殿、播磨内侍など、琴かき合せて、いとおもしろし。六日の辰たつの時にことはじまる。寢殿ねどのの階はしの間に、御茵ごいんまゐりて、内のうへおはします。第二の間につ後の宮、その次永福門院、昭訓門院も渡らせ給ひけるにや。階はしの東あづまに二條、前殿さきのどの道平、堀河、大納言具親、春宮、大夫公宗、侍従、中納言公明、御子左みこひだり、中納言爲定、中宮、權、大夫公泰などさぶらはる。右大臣兼季琵琶、春宮、權、大夫冬信笛、源中納言具行笙、治部卿筆簾、琴は室町の宰相公春、琵琶は園、宰相基成など聞えしにや。馬うまその日の事見給へねば、さだかにはなし。稚わかき童部わらわなどの、しどけなく語りしまゝなり。この中に、御覽ごらんじたる人もおはすらむ。承らまほしくこそ侍はべれ」といふ。御簾ごらんのうちにも、大納言二位殿琵琶、播磨の内侍筆、女藏人高砂にょくらうどかさといふも、

琴ひ弾くとぞ聞えし。まことにやありけむ。中務の宮まゐり給へり。兵仗ひやうじやうたまはり給ひて、御直衣ごちやくに、太刀たちはき給へり。御隨身ども、いと清らに裝束さうさくきて、所えたるさまなり。萬歳樂まんざいがくより納蘇利なそりまで、十五帖手じふごしやうてをつくしたる、いと見どころ多し。青海波せいがはを地下ぢかばかりにてやみぬるぞ、飽かぬ心地しける。暮れかゝるほど、花の木はなのみの間に、夕日花ゆふひはなやかにうつろひて、山の鳥も聲をしまぬほどに、陵王りやうわうのかゞやきて出でたるは、えもいはすおもしろし。その程、うへも、御引直衣ごひなほしにて、椅子いしにつかせ給ひて、御笛吹かせ給ふ。常より殊に雲井うゑいをひゞかすさまなり。宰相、中將顯家、陵王りやうわうの入綾いりあやを、いみじう盡つくしてまかづるを、召しかへして、前まへ、關白殿御衣せみづかとりてかづけ給ふ。紅梅べにばらのうはぎ、二あるのきぬなり。左の肩にかけて、いさゝか一曲舞ひてまかゞでぬ。右の大臣太鼓おほなだうち給ふ。その後源中納言具行探桑老たみさうらうを舞ふ。これも紅の打ちたる、かづけ給ふ。又の日は、無量光院むりやうこうゐんの前の花の木はなのみ陰かげに、上達部かみかみたちつゞき給ふ。廂ひさしに椅子いし立て、うへはおはします。御遊ごゆうはじまる。拍子はうしに治部卿ちぶのきみまゐる。うへも櫻人さくらびとうたはせ給ふ。御聲ごこゑいとわか花やかにめでたし。去年こぞの秋あきの頃かよ、資親すけちかの中納言に、この曲うたはうけさせ給ひて、賞あきに正二位ただふたゐゆるさせ給ひしも、今日けふのためとにやありけむと、いと艶えびなり。物の音ねども整ととのほりて、いみじうめでたし。その後、歌ども召よさる。花を結びて文臺ふみだいにせられたるは、保安のためしとぞいふめりし。春宮、大夫



公宗序か、れけり。

海内艾安之世、城北花開之春、我君促<sub>レ</sub>宸臨<sub>ニ</sub>於此處<sub>ニ</sub>、調樂懸<sub>ニ</sub>於殿中<sub>ニ</sub>、重課<sub>ニ</sub>六義<sub>ニ</sub>之言葉<sub>ニ</sub>、屢賞<sub>ニ</sub>數柯之濃花<sub>ニ</sub>、奉梢疑<sub>ニ</sub>出雲<sub>ニ</sub>之昔雲<sub>ニ</sub>再懸<sub>ニ</sub>滿庭省<sub>ニ</sub>廻雪<sub>ニ</sub>之昨雪<sub>ニ</sub>猶殘<sub>ニ</sub>、雖<sub>ニ</sub>小風情<sub>ニ</sub>、悠瀝<sub>ニ</sub>露詠<sub>ニ</sub>、其詞曰、

時をえてみゆきかひある庭の面に花もさかりの色やひさしき

御製、

代々の御幸のあとと思へば

この上わすれ侍る、後にも見出してとぞ。中務のみこ、

代々をへてたえじとぞ思ふこの宿の花にみゆきの跡をかさねて

誰もく、このすぢにのみ惑はされて、花のみゆきの外は、珍しきふしもなければ、さのみも記しがたし。よろず飽かず名残多かれど、さのみはにて、九日に還らせ給ひぬ。

その夏の頃、御門例ならずおはしまして、御藥の事などきこゆ。いと重くのみならせ給ふとて、世の中あわてたるさまなり。時しもあれや、かの一年とられたりし俊基を、又いかに聞ゆる事の出きたるにか、搦めとらむとすれば、内へ逃げてまゐるを、追ひ騒ぎて、陣のほとりまで、武士

どもうちこみのしれば、こは何事と、聞きわくまでもなし。いともの騒がしく、肝つぶれて、あ  
る限り惑ひあへり。うへも物覚え給はぬ御ありさまにて、大殿籠れるに、かゝるよし奏すれば、い  
みじう思さる。遂に、またの日、六波羅へつかはしたれば、東へ率てくだりぬ。うへは、御惱おこ  
たらせ給ひて、いと安からず思す事まされり。日頃も、御心にかけてさせ給へる事なれば、速に  
このあらし遂げてむと、ひたぶるに思し立ちて、忍びてこゝかしこに、その用意すべし。  
後の宮の御腹の一品内親王、御占にあはせて給ひて、去年の冬頃より、御潔齋ありつる、今日明  
日、齋宮に居給ふ。八月二十日、まづ河原へ出でさせ給ひて、やがて野の宮に入らせ給ふ。その  
程の事ども、いみじう清らなり。

この御いそぎ過ぎぬれば、まづ六波羅を御勘事あるべしとて、かねてより宣旨に従へりし兵どもを、忍びて召す。源中納言具行とりもちて事行ひけり。むかし龜山院に、御子など産み奉りて候ひし女房、この頃は、後の宮の御方にて、民部卿三位と聞ゆる御腹に、當代の御子も出でものし給へりし、山の前座主にて、今は大塔の二品法親王尊雲と聞ゆる、いかで習はせ給ひけるにか、弓ひく道にもたけく、大かた、御本性はやりかにおはして、この事をも、おなじ御心におきて宣ふ。又中務の親王の一つ御腹に、妙法院の法親王尊澄と聞ゆるは、今の座主にてものし給へば、かたが



た、比叡の山の衆徒も、御門の御軍に、加はるべきよし奏しけり。

つゝむとすれど、事廣くなりければ、武家にも早う漏れ聞えて、さにこあなれと用意す。まづ九重を厳しくかため申すべしなど定めけり。かくいふは、元弘元年八月二十四日なり。雑務の日なれば、記録所におはしまして、人の争ひ愁ふる事どもを、行ひくらすせ給ひて、人々もまかして、君も本殿にしばしうち休ませ給へるに、今夜既に、武士どもきほひ参るべしと、忍びて奏せる人ありければ、とりあへず、雲の上を出でさせ給ふ。中宮の御方へわたらせ給ひてもしめやかにあらず、いとあわたし。かねて思し設けぬにはあらねども、事のさかさまなるやうになりぬれば、よろづうきくと、我も人もあきれ居たり。内侍所、神璽、寶劔ばかりをぞ、忍びてゐてわたらせ給ふ。うへは、なよらかなる御直衣たてまつり、北の對より、やつれたる女車のさまにて、忍び出でさせ給ふ。かの二條院の昔も、かくやと思ひ出でらる。

日頃の御本意には、まづ六波羅を攻められむ紛に、山へ行幸ありて、かしこへ兵どもを召して、山の衆徒をも相具し、君の御かためとせらるべしと定められければ、かの法親王たちも、その御心して、坂本に待ち聞え給ひけれど、今はかやうに事違ひぬれば、あへなしとて、俄に道をかへて、奈良の京へぞ赴かせ給ふ。中務の宮も、御馬にて追ひて参り給ふ。九條わたりまで、御車に

て、それより、御門も、狩の御衣にやつれさせ給ひて、御馬にたてまつるほど、こは如何にしつる事ぞと、夢の心ちして思さる。御供に按察、大納言公俊、萬里小路、中納言藤房、源中納言具行、四條中納言隆資などまゐれり。いづれもあやしき姿に紛はして、暗き道をたどりおはするほど、げに、「闇のうつゝ」の心地して、我にもあらぬさまなり。丑三つばかりに、木幡山過ぎさせ給ふ、いとむくつけし。木津といふわたりに、御馬とめて、東南院の僧正のもとへ、御消息つかはす。それより御輿を参らせたるに奉りて、奈良へおはしましたつきぬ。こゝに中一日ありて、二十七日、和東の鷺峯山へ行幸ありけれども、そこも、さるべくやなかりけむ、笠置寺といふ山寺へ入らせ給ひぬ。所のさま、たやすく人の通ひぬべきやうもなく、よろしかるべしとて、木丸殿のかまへをはじめらる。これよりぞ、人々、すこし心地とりしづめて、近き國々の兵ども召しにつかはす。さて都には、二十四日の夜、六波羅より常陸守時知馳せ参りて、百敷の中をあさりさわぐ。その程、人の曹司などに、おのづから落ち残りたる女房の心地、いはむ方なし。おはします殿を見れば、近き御厨子、御調度ども、なにくれ、硯なども、さながらうち散りて、只今までおはしませるあと、見えながら、宮人などだに一人もなし。女房の曹司々々より、樋洗めく女の童など、我先にと走りいで、調度ども運びさわぎ、くづれ出づる氣色ども、いとあさましく目もあやなり。錦の



几帳の内に、いつかれましつる後の宮も、何の儀式もなく、忍びてあわて出でさせ給ひぬれば、あたりくかき拂ひ、時の間に、いとあさましく、御簾、几帳など、踏みしだき引き落して、火の影もせず、こゝもかしこも暗がりて、うち荒れたる心地す。今朝まで、九重の深き宮の中に、出入り仕へつる男女、ひとりともらず、えもいはぬ武士どもうち散り、荒々しげなるけはひに、續松たかくさへげて、細殿、渡殿、何くれ、目かげさして、あさりたるけしき、氣疎くあさまし。世は憂きものにこそと、時の間に、げに心あらむ人は、やがて修行の門出にもなりぬべくぞ覺ゆる。中宮は、忍びて、野の宮殿の傍にぞおはしましつきにける。宣房の大納言の二郎、季房の宰相ばかり、御宿直にさぶらふ。

二十五日の曙に、武士どもみちへて、御門の親しく召しつかひし人々の家々へ、押入り押入り捕りもて行くさま、獄卒とかやの現れたるかど、いとおそろし。萬里小路、大納言宣房、侍従、中納言公明、別當實世、平宰相成輔、一度に、皆六波羅へゐて行きぬ。かやうの事を見るに、いとど肝心も失せて、おのづからとり残されたる人も、心と皆、かき消ち行き隠るゝほどに、主なき宿のみぞ多かる。

坂本には、行幸を待ち聞え給ひけるに、引き違へ、南さまへおはしましぬれば、そのよし衆徒に

聞かれなば、悪しかりぬべし。又とまれかくまれ、まことのおはしまし所を、左右なく武家へ知らせじの謀にやありけむ、花山院の大納言師賢を山へつかはして、忍びて御門のおはしますよしにもてないて、かの兩法親王事行ひ給ひつゝ、六波羅の兵どもの圍みを防がせ給ふ。その日は、大納言も、大塔の前座主の宮も、うるはしき武士姿に出でたゝせ給ふ。卯花緘の鎧に、鉞形の兜たてまつり、大矢負ひてぞおはする。妙法院の宮は、生絹の御衣の下に、萌黄の御腹巻とかや著給へり。大納言は、唐の香染の薄物の狩衣に、掲焉に赤き腹巻をすかして、さすがに、卷繪の細太刀をぞはき給ひける。

六波羅より、御門へにおはしますと心得て、武士ども多くまわり圍む。山法師も戦ひなどして、海東とかやいふ兵討たれにけり。事のはじめに、東うせぬる、めでたしなどぞ言ふめる。かかれども、御門笠置におはしますよし程なく聞えぬれば、謀られ奉りにけるとて、山の衆徒も、少少心がはりしぬ。宮々も逃げ出で給ひて、笠置へぞまうで給ひける。大納言は都へ紛れおはすとて、夜ぶかく志賀の浦を過ぎ給ふに、有明の月くまなく澄みわたたりて、寄せ返る浪の音もさびしきに、松ふく風の身にしみたるさへ、とりあつめ心ぼそし。

思ふことなくぞ見ましほのくとありあけの月の志賀の浦波



その後辛うじてぞ、笠置へはたどり参られける。

かやうの事ども、例のはや馬にて、東へ告げやりぬ。只今の將軍は、むかし式部卿久明親王とて、下り給へりし將軍の御子なり。守邦の親王とぞ聞ゆる。相模、守高時といふは、病によりて、未だ若けれど、一年入道して、今は世の大事どもいろはねど、鎌倉の主にてはあめり。心ばへなどいかにぞや、うつゝなくて、朝夕好む事とは、犬くひ、田樂などをぞ愛しける。これは最勝園寺入道貞時といひしが子なれば、承久の義時よりは、八代にあたり。この頃、私の後見には、長崎入道圓基とかやいふものあり。世の中の大小事、只この圓基が心のまゝなれば、都の大事かばかりになりぬるをも、かの入道のみぞ、とりもちておきて計らひける。重き武士ども多く上すべしと聞ゆ。大かた、京も鎌倉も、騒ぎのしる様けしからず。承久の昔もかくやと、今更に思ひやる。

持明院殿には、春宮おはしませば、思の外にめでたかるべき事なれど、今日明日は、未だ軍のまぎれにて、何の沙汰もなし。御宿直の者の、うべくしきもなくて、離れおはしますも、あぶなき心地すればにや、せめても六波羅近くとて、六條殿へ、本院、新院、春宮、引き続きに移らせ給ひぬれど、日にそへて、天の下さわざみち、恐しき事のみ聞ゆれば、猶これも危しとて、六波羅の北

に、代々の將軍の御料とて、つくりおける檜皮屋ひとつあるに、兩院、春宮入らせ給ふ。大方はいつものしきやうなれど、よろしき時こそあれ、かばかりの際には、何の儀式もなかるべし。

笠置殿には大和、河内、伊賀、伊勢などより、兵ども参り集ふ中に、事の始めより、頼み思されたりし、楠木兵衛正成といふものあり。心猛くすくよかなる者にて、河内國に、おのが館のあたりを、いかめしくしたゝめて、このおはします所、もし危からむ折は、行幸をもなし聞えむなど用意しけり。東のえびすども、やうく攻め上るよし聞ゆ。もとより京にある武士ども、我先にときほひまゐる。木丸殿には、さこそいへ、むねくしきものなし。いかになり行くべきにかと、いと心細く思し亂る。我が御心もての事なれば、かこつ方なれど、故郷の空も、あはれに思し出でらる。秋も深くなり行くまゝに、山の木の葉のうちしぐれ、谷の嵐のおとづるゝも、警の競ふかと、肝を消す御住居、いつしか御身をかへたる御心地し給ふもあぢきなし。

うかりける身を秋風にさそはれて思はぬ山のみちをぞ見る  
既にあづまの武士ども、雲霞の勢をたなびかし上るよし聞ゆれば、笠置にもいみじう思し騒ぐ。もとよりのと嶮しき山のつらさを、えもいはず、木戸、逆茂木、石弓などいふ事どもしたためらる。さりともたやすくは破れじと、頼ませ給へるに、後の山より、御敵どもくづれ参りて、



木戸ども焼きはらひ、おはしますあたり近く、既に煙もかゝりければ、今はいかゞせむにて、あやしき御姿にやつれて、たどり出でさせ給ふ。座主ざすの法親王、御手をひき奉り給へるも、いとほかなげなる御有様なり。中務の御子、大塔の宮などは、かねてより、こゝを出でさせ給ひて、楠木が館たちにおはしましけり。行幸も其方そなたさまにやと思し心ざして、藤房、具行兩中納言、師賢の大納言入道、手をとりかはして、焔ほらの中を免れ出づる程の心ちども、夢とだに思ひもわかれず。いとあさまし。少し延びさせ給ひてぞ、御馬たづね出でて、君ばかり奉りぬれど、ならばぬ山路に、御心地も損そなはれて、誠に危く見えさせ給へば、たかまの山といふわたりに、しばし御心地をためらふ所に、山城國の民にて、深須みすの五郎入道とかいふもの、参りかゝりて、案内聞えたるしも、いとめざましう口惜し。上達部かんだちめ思ひやる方なくて、只目を見かはして、いかさまにせむとあきれたるに、東あづまより上れる大將軍にて、陸奥國の守貞直といふもの、大勢にて参れり。今はたゞ、ともかくも宣のたまはすべきやうなければ、遂にかひなくて、敵のために、御身をまかせぬるさまなり。

やがて宇治に行幸あるべきよし奏すれば、御心にもあらで、ひかされおはします程に、心憂しといふも斜ななめなり。具行、藤房、忠顯、少將など、やがておのが手のものどもに隨へさせつ。大納言入道、御馬のしりに走りおくれて、こゝかしこの岩かげ、木のもとに休みつゝ、とかくためらふ程

に、それも見つけられて捕られぬ。君をば宇治へ入れ奉りて、まづ事の上し、六波羅へ聞ゆる程に、一二日御逗留とまりあり。かくいふは九月三十日なれば、空のけしきさへ時雨がちに、涙催なみだしがほなり。平等院の紅葉御覽じやらるゝも、かゝらぬ行幸ならばと、あへなし。御冷泉院かとよ、こゝに行幸し給ひて、三四日おはしましける、その世の人の心地、上下何事かはと、羨うらやましくあはれに思さる。

十月三日、都へ入らせ給ふも、思ひしにかはりて、いとすさまじげなる武士ども、衛府ゑふのすけの心地して、御輿みこし近くうち圍みたり。鳳輦ほうけんにはあらぬ、網代輿あじろこしの怪しきにぞたてまつれる。六波羅の北なる檜皮屋ひだりには、もとより、兩院、春宮おはしませば、南の板屋いたやのいとあやしきに、御しつらひなどしておはしませするも、いとほしう忝かたじけなし。間近きほどに、よろづ聞しめし、御覽じふるゝ事ごとにつけても、いかでか御心動かぬやうはあらむ。口惜しう思しみだる。ならばぬ御宿やどに、時雨の音さへはしたなくて、

まだなれぬいたやの軒のむら時雨音を聞くにもぬるゝ袖かな

中務の宮は、正成がもとにおはしましつれど、御門のかくならせ給ひぬれば、今はいかひなしとて、それも都へ入らせ給ひて、佐々木判官時信といふものゝ家にわたらせ給ひぬ。つれづれと、物



思しみだるゝ外の事なし。

世のうさを空にも知るや神無月ことわり過ぎてふる時雨かな

この御子は、藤大納言爲世の御うまごにてもし給へば、かの家に、常は住み給ひし程に、大納言の末の女、大納言の典侍と聞ゆるに御覽じつきて、その御腹に、姫宮など出で給へり。又、中宮の御匣殿は、宮の御兄の右の大臣公顯と聞えし御女なり。その御腹にも、男御子などおはします。思ふまゝなる世をも待ち出で給はゞと、誰も行末頼もしく思ひ聞えつるに、かくおもひの外に、あさましき事の出でぬるを、深う思ひなげく人々かず知らず。御匣殿は失せ給ひしかば、この頃は、たゞこの典侍の君をのみ、またなきものに思しかはしつるに、吹きかふ風も、ま近き程におはすれど、御對面は思ひもよらず。おぼつかなさの慰むばかりなる御消息などだに、通ふこともかなはぬ御有様を、哀にいふせう、思し結ばほれたり。一つ御腹の座主の法親王も、長井の高廣とかやいふ者、あづかり奉りぬ。御門遠くうつらせ給はむほど、この御子達も、おのがちりくになり給ふべしなど聞えけり。

春宮は、世をつゝしみて、六波羅に渡らせ給ふ。先帝は敵のために、同じ御宿、葦垣ばかりを隔にておはしませば、主なき院のうち、いとさびしくて、衛士のたく火も、かげだに見えず。内には

いつしか、けしかるものなど住みつきて、ある時は、紅の袴長やかにふみ垂れて、火ともしたる女、見るまゝに、丈は軒とひとしくなりて、後にはかき消ち失するもあり。またいみじう光を放ちて、髪を前に亂しかけたる童なども見えけり。鬼殿などはかくやありけむと、おそろし。人住まで年経あれぬる所などにこそ、かゝる事も、おのづからありけれ。僅に一月二月の中に、かゝるべきにはあらぬを、これかれ、いと怪しきわざなるべし。

さて、例の東より御使のぼれり。代々のためしとかやとて、秋田の城の介高景、二階堂出羽の入道道雲とかやいふものぞ参れる。西園寺、大納言公宗卿に事のよし申して、春宮御位につき給ふ。さるべき御事といひながら、今日明日とは見えざりつるに、いとめでたし。さて六波羅より、この度は、世の常の行啓の儀式にて、持明院殿へ入らせ給ふ。兩院もひきつくりひたる御幸のよしなり。ひしめき立ちぬる世の音なひを聞しめす先帝の御心地、たとしへなく、妬く人わろし。もとの内裏へ、新帝うつらせ給ふ。上達部残りなく仕う奉らる。院も常磐井殿へおはしまいて、世の政事聞しめせば、御宇多院のむかし思ひ出でられてあはれなり。

いつしか十月十二日綸旨下されて、前の御代の人々、大中納言宰相すべて十人、宣房、公明、藤房、具行、隆資、實世、實治、季房、隆重、忠顯、官やめらるゝよし聞ゆるも、昨日までの時の花



と見えし人々、つかのまの夢かとあはれなり。かゝるにつけては、一つ御族のみ、今はわく方なく定まり給ふべきかと、世の人も思ひ聞ゆる程に、龜山院の御ながれ絶ゆべきにはあらずとにや、先坊はうの一の宮を太子に立てまつらる。御乳母めいぼの雅藤の宰相さうざうの法性寺ほうしやうじの家に渡らせ給へるを、土御門高倉たかくらの先坊せんぱくの御跡ごあとへ入れ奉りて、十一月八日坊はうに定まり給ふ。今は思ひの絶えぬる心地しつるに、いとめでたし。松が浦島に年經給ひぬる入道の宮も、御親の心地にておはしますべければ、太上天皇たうてんかうになすらへて、崇明門院すゑあきかどときこゆ。よろづ斧きりぎりすの柄朽えくちにし昔むかしを改めたる宮の中なり。ありし後、おのがさまく、まかして散りにし古女房こにようばう、上達部かみかたべ、殿上人どのじやうにんなど、世の中屈くつじいたくて、こゝかしこに籠り居たりしも、いつしかと参り集ふさま、谷の鶯うすの春待ちつけたる心地して、いと頼たのもしげなり。傳つたには、久我くがの右の大臣長通ちぢんちやうとう、大夫には、中院なかつ、大納言通顯たうなごんちゆうけんなり給ふ。なべて世に、年頃埋うづもれたりし人々、いつしか、官位くわんゐさまざまに思ふまゝなる氣色けしきども、目の前にうつりかはる世のありさま、今更ならねど、いと著しるく掲焉けちえんなるも、あぢきなし。かくて年もくれぬ。

第十九 久米のさら山

元弘二年の春にもなりぬ。新しき御代の年の始には、思ひなしさへ花やかなり。うへも若う清きよらにおはしませば、よろづめでたく、百敷ももぢきの内、何事もかはらず。さるべき公事くわんじのをりく、さらでも、院、内、おなじ陣ぢんのうちなれば、ひとつに立ちこみたる馬車うまぐるま、隙ひまなく賑にぎはしけれど、見し世の人は、一人ひとりもまじろはず。参りまかづる顔のみぞかはれる。

先帝せんていは、いまだ六波羅むつはらにおはします。二月ふたつきの頃、空の氣色けしきのどやかに霞みわたりて、ゆるらかに吹く春風はるかぜに、軒のきの梅うめなつかしく香りきて、鶯うすの聲こゑうららかなるも、うれはしき御心地には、もの憂うれかる音ねにのみ聞し召しなさる。異様ことやうなれど、かの上陽人じやうやうじんの宮の中思ひよそへらる。長き日影ひかげも、いと暮し難むづかし御慰ごなぐさめにとや聞え給ひけむ、中宮なかつみやより、御琵琶ごびば奉らせ給ふついでに、いさやかなる物のはしに、

思ひやれちりのみつもる四よつの緒なにはらひもあへずかゝる涙を  
げにと思し召しやるに、いと悲しくて、玉水たまみづの流るゝやうになむ。御かへし、



かきたてし音を絶ちては、君戀ふる涙の玉の緒とぞなりける

かの承久のためしにとや、東よりの御使には、長井の右馬助高冬といふものなるべし。これは頼朝の大將の時より、鎌倉に重き武士にて、いまだ若けれども、かゝる大事にも、上せけるとぞ申しける。遂に隠岐國へ遷し奉るべしとて、三月のはじめの七日に、都を出でさせ給ふ。今はと聞しめす御心惑ひども、いへば更なり。所々の歎、近うつかまつりし人々の心地ども、おき所なく悲し。御門も限りなく御心悩むべし。いと斯うしも人に見えじと、かつは思ししづむれど、あやにくにすすみ出づる御涙を、もて隠しつゝおはします。古りにし事を思し出づるにも、立ちかへり、また世をやすく思さむ事のいと難ければ、よろづ今をとぢめにこそと、思しめぐらすに、人やりならず、口惜しき契加はりける前の世のみぞ、盡きせず恨らめしき。

つひにかく沈みはつべき報あらば上なき身とはなに生れけむ

巳の時ばかりに出でさせ給ふ。網代の御車に、御前どもなどは、故院の御世より仕う奉りなれにしもものども、ある限りまわれり。御車寄に、西園寺中納言公重さぶらひ給ふ。うへは、御冠に、世のつねの御直衣、指貫、白綾の御衣一かさね奉れり。去年の今日は、北山にて花の宴させ給ひしも、あはれに思し出でられて、その日の事かきつらね、戀しく思さる。人々の祿にこそは賜はせ

しを、今日は御旅衣にたちかふるも、あはれに、定なき世のならひ、今更こゝろ憂し。御車にたてまつるとて、日頃おはしましつる傍の障子に、書きつけさせ給ふ。

いさ知らずなほ憂き方の又もあらばこの宿とても忍ばれやせむ

御供には内侍の三位殿、大納言君、小宰相など、男には行房の中將、忠顯の少將ばかり仕うまつる。己がじし、都の名残ども、言ひ盡しがたし。六波羅よりの御送りの武士、さならでも名ある兵ども、千葉介貞胤をはじめとして、覺えことなる限り、十人選びてたてまつる。いろ／＼の綾錦の水干、直垂などいふもの、さまざまに織りつくし、染めつくして、いみじき清らを好み整へたれば、かくてしも、世に珍しき見物なり。六波羅より、七條を西へ、大宮を南へ折れて、東寺の門前に御車おさへらる。とばかり御念誦あるべし。物見車所せきほどなり。よろしき女房も、重裝束などして、徒歩のものども、打ちまじれり。若きも老いたるも、尼法師、あやしき山賤まで、立ちこみたるさま、竹の林に異ならず。おの／＼目押し拭ひ、鼻すゝりあへる気色ども、げにうき世のきはめは、今に盡しつる心地ぞする。崇徳院の讃岐におはしましけむ程の有様、御鳥羽院の隠岐にうつらせ給ひけむ時なども、さこそはありけめなれど、傳にのみ聞きて、見ねば知らず。これを始めたる心地ぞする。日頃は、何の御匂にも觸れず、數ならぬ人、及ばぬ身までも、今日の御



別のあはれさ、なべておき所なげにぞ、惑ひあへるかし。君も、御簾少じかきやりて、此面彼面御覽じわたしつゝ、御目とまらぬ草木もあるまじかめり。岩木ならねば、武士の鎧の袖ども、しほとけげにぞ見ゆる。都の梢を、隠るゝまで御覽じおくるも、なほ夢かと覺ゆ。鳥羽殿におはしましつきて、御粧改め、破子などまゐらせけれど、氣色ばかりにてまゐらず。これより御輿にたてまつれば、留るべき御前どもの、空しき御車を、泣くく遣りかへるとて、くれ惑ひたる氣色、いと堪へがたげなり。

かくて君は遙に赴かせ給ふ。淀のわたりにて、むかし八幡の行幸ありし時、橋わたしの使なりし佐々木の佐渡の判官といふもの、今は入道して、今日の御送りつかまつれるに、その世の事おぼし出でられて、いと忍びがたさに賜はせける、

しるべする道こそあらずなりぬとも淀の渡りは忘れしもせじ  
 又の日は、中務の親王土佐の國へおはします。御供に爲明、中將まゐる。日頃かくあやしき御宿にももし給ふを、辱く思ひ聞えつるに、遙なる世界にさへゐておはしませば、まして、いかさまなるわざをして、御覽せさせむと、主時信經營し騒ぐ。宮すでに立たせ給ふとて、瓶にさしたる花を折らせ給ひて、

花は猶とまるあるじにかたらへよわれこそ旅にたちわかるとも

おなじ日、やがて妙法院の座主尊澄法親王も、讃岐國へおはします。

先帝は、今日、津の國昆陽野の宿といふ所につかせ給ひて、夕月夜ほのかにをかしきを、ながめおはします。

命あればこやの軒端の月も見つまたいかならむゆく末のそら

こや野より出でさせ給ひて、武庫川、神崎、難波、住吉など過ぎさせ給ふとて、御心のうちに、思はず筋あるべし。廣田の宮のわたりにても、御輿とどめて、拜み奉らせ給ふ。葦屋の里、雀の松原、布引の瀧など御覽じやらるゝも、ふるき御幸ども思し出でらる。生田の森をば、とはで過ぎさせ給ひぬめり。湊川の宿に著かせ給へるに、中務宮は、昆陽野の宿におはしますほど、間近く聞き奉らせ給ふも、いみじう哀にかなし。宮、

いとせめてうき人やりの道ながら同じとまりと聞くぞ嬉しき

福原の島より、宮は御船にたてまつる。御門は、和田の岬、刈藻川をうちわたして、須磨の關にかからせ給ふ。かの行平の中納言、「關ふきこゆる」といひけむは、浦より遠なるべし。あはれに御覽じわたさる。源氏の大将の、「なくねにまがふ」と宣ひけむ浦波、今もげに、御袖にかゝる心地する



も、さまざま御涙の催しなり。播磨の國へ著かせ給ひて、鹽屋、垂水といふ所をかしきを、問はせ給へば、「さなむ」と奏するに、「名を聞くより、からき道にこそ」と宣はせて、さし覗かせ給へる御さま容貌、古りがたくなまめかし。け近き限りは、あはれにめでたうもと、思ひ聞ゆべし。大くら谷といふ所少し過ぐるほどにぞ、人麿の塚はありける。明石の浦を過ぎさせ給ふに、「島がくれゆく船」ども、ほのかに見えてあはれなり。

水の泡の消えてうき世を渡る身のうらやましきはあまの釣船  
野中の清水、ふたみの浦、高砂の松など、名ある所々御覽じわたさるゝも、かゝらぬ御幸ならば、をかしうもありぬべけれど、萬かきくらす御みだり心地に、御目とまらぬも、我ながらいたう屈じにけるかなと思さる。いと高き山の峯に、花おもしろく咲きつゞきて、白雲をわけゆく心地するも艶なるに、都の事かすゝ思し出でらる。

花は猶うき世もわかすさきてけりみやこも今や盛りなるらむ  
あと見ゆる道のしをりのさくら花この山人のなさをぞ知る

十二日に、加古川の宿といふ所におはします程に、妙法院、宮讚岐へわたらせ給ふとて、同じ道、少し違ひたれど、この川の東野口といふ所まで、参り給へるよし奏せさせ給へば、いとあはれに相

見まほしう思さるれど、御送の兵ども許し聞えねば、宮むなく歸らせ給ふ御心のうち、堪へがたく亂れまさるべし。さらなる事なれど、かばかりの事だに、御心に任せずなりぬる世の中、いへばえに、つらく恨めしからぬ人なし。

十七日、美作の國におはしまし著きぬ。御心ち惱ましくて、この國に二三日やすらはせ給ふほど、かりそめの御宿なれば、物深からで、候ふ限りの武士ども、おのづからけ近く見奉るを、あはれにめでたしと思ひ聞ゆ。君も思ほし續くる事ありて、

あはれとは汝も見らむ我が民と思ふころは今もかはらす  
おはしますに續きたる軒のつまより、煙の立ちくれば、「庵にたける」と、うち誦せさせ給へるも艶なり。

よそにのみ思ひぞやりし思ひきやたみの籠をかくて見むとは  
二十一日、雲清寺といふ所にて、いとおもしろき花を折りて、忠顯、少將奏しける。

かはらぬを形見となして咲く花の都はなほもしのばれにける  
御かへし、  
色も香も變らぬしもぞうかりけるみやこの外の花のこすゑは



又小山の五郎とかいふ武士に、おなじ花をやるとて、少將、

憂きたびとおもひははてじ一枝の花のなさけのかゝる折には

かくて猶おはしませば、來し方は、そこはかとなく霞みわたりて、「あはれに遠くも來にけるかな」と、日數にそへて、都のいとど隔たりはつるも、心細うおぼさる。ほのかに咲きそむと見えし花の梢さへ、日數も山も重なるにそへて、うつろひまさりつゝ上り下るつゞらをりに、いと白く散りつもりて、むら消えたる雪の心ちす。

花の春また見むことのかたきかなおなじ道をばゆきかへるとも

いとかたしとは思すものから、猶さりとも、平かにだにあらば、自ら御本意遂ぐるやうもありなむなど、御心もて慰め思すもはかなし。久米のさら山といふ所越えさせ給ふとて、

聞きおきし久米の皿山越えゆかむ道とはかねて思ひやはせし逢坂といふは、東路ならでもありけりと聞しめして、

立ちかへりこえゆく關と思はゞやみやこに聞きしあふ坂の山

三日月の中山にて、昔後鳥羽院の仰せられけむ事思し出づるさへ、げに憂かりけるためしなり。

傳へ聞く昔がたりぞうかりけるその名ふりぬる三日月の森

御道半ばになりぬれば、御送の者ども、上下、都出でしよりもなほ花やかに、今めかしう装束きかへたり。大方は、あやしうさま異なる御幸なれど、道すがらの御まうけ、國々に心づかひしたる氣色などは、斯うさまの御ありきとは見えす、いとやむごとなくなむ。さはいへど、今まで、國の主にて、世をもいみじう治めさせ給へりける名残にやあらむ、いとねむごろにのみ仕うまつれり。古の御幸どもには、かうはあらざりけりとぞ、古き事知れる人々いひ侍りける。四月一日の頃、百敷の宮の中おぼし出でられて、

さもこそは月日も知らぬ我ならめ衣がへせし今日にやはあらぬ

出雲の國安來の津といふ所より、御船にたてまつる。大船二十四艘、小舟どもは、數も知らず續きたり。遙におし出すほど、今一霞、心細うあはれにて、誠に、「二千里の外」の心地するも、今更めきたり。かの島におはしまし著きぬ。昔の御跡は、それとばかりのしるしだになく、人の住家も稀に、おのづから、蟹の鹽やく里ばかり遙にて、いとあはれなるを御覽するにも、御身の上はさしおかれて、まづかの古の事思し出づ。かゝる所に世をつくし給ひけむ御心のうち、いかばかりなりけむと、哀に辱く思さるゝにも、今はた、更にかくさすらへぬるも、何により思ひ立ちし事ぞ。かの御心の末やはたし遂ぐると、思ひし故なり。昔の下にも、あはれと思さるらむかしと、よろ



づにかき集め盡きせずなむ。海づらよりは少し入りたる國分寺といふ寺を、よろしきさまにとり拂ひて、おはしまし所に定む。今はさは、かくてあるべき御身ぞかした、思ししづまる程、猶夢の心地していはむ方なし。そこら参りし兵どもまかづれば、かいしめりのどやかにぬる、いと心ほそし。昔こそ、受領ども、任のほど、その國をしたゝめ行ひしか。この頃は、只名ばかりにて、何處にも、守護といふものゝ、目代よりはおぞましきを据ゑたれば、武家のなびきにてのみ、公さまの事は、よろづ疎かにぞしける。葛城の大君を陸奥國へ遣したりけむも、かくやとあはれなり。

中務の御子も、土佐におはしましつきて、御送りの武士に賜はせける、

思ひきやうらめしかりし武士の名残を今日は慕ふべしとは

かやうの類、あまた聞えしかど、何かはさのみ、皆人もゆかしからず思さるらむとてなむ。

都には、三月二十二日、御即位の行幸なれば、世の中めでたくのゝしる。本院、新院ひとつに奉りて、待賢門のほとりに、御車立て、見奉らせ給ふ。よろづあるべきさまに、整ほりてめでたし。まことや、中宮は、そのまゝに、御髪もたぐる時もなく、沈み給へる御ありさま、いと理に、遠き御別の悲しさにうちそへて、御胸の安き間もなく思しこがる。後の位もとゞめられ給ひて、院

號のさだめなど、人の上のやうに、ほのかに聞し召すも、うれしからぬ世なり。禮成門院とかや申すなり。年月は、御身の人笑へなる様にて、天の下の騒がれなりしをこそ思し歎き、御門も苦しき事に思し宣はせけるに、今はなか／＼その筋の事は、かけても思さず、さまざまなりし御修法の壇ども、あとかたなく毀ちはて、かきさましぬ。ひたすらに、只かゝる世の憂さをのみ、思し惑ふに、日頃経れど、御湯なども絶えて御覽じいれねば、そこはかたなく、いと損はれまさりて、ながらふべくも見え給はず。隠岐よりは、たまさかの御消息などの通ふばかりにて、覺束なくいぶせき事、多く積りゆくも、いつをあふせの限りともなく、定めなき世に、やがてかくてやとぢめむとすらむと、互にいみじう思さる。

かしこに参り給へる内侍三位の御腹にも、御子たち數多おはします。いづれも、未だ稚なき御程にはあれど、物思し知りて、いみじう戀ひ聞え給ひつゝ、をり／＼は、忍びてうら泣きなどし給ふ。稚うものし給へば、遠き國までは遷し奉らねど、もとの御後見をば改めて、西園寺、大納言公宗の家にぞ渡し奉る。八になり給ふぞ、御兄ならむかし。北山におはするほど、夕暮の空、いと心すごう、山風あらゝかに吹きて、常よりも物悲しく思されければ、

庭松緑老秋風冷 蘭竹葉繁白雪埋



つくづくとながめくらし入相の鐘のおとにも君ぞこひしき  
稚き御心にも、はかなくうちひそみ給へる、いと哀なり。こゝもかしこも、盡きせず思し歎く様、  
いはずとも、皆推し量るべし。

宮の宣旨も、いたう時めきて、三位してき。その御腹の若宮は、法仁法親王花山院、大納言師賢の御めのと  
にて、殊の外にかしづかれ給ひしも、この頃は、ひき忍びておはします。母君も、世の憂さに堪へ  
ず、さまかへて、心深くうち行ひつゝ、涙ばかりを友にて明し暮すに、祖母北の方さへ失せたりと  
聞きて、時々いひかはしてけるなま女房のもとより、程経て後なりければ

うきにまたかさぬる夢を聞きながら驚かさでもなげき來しかな  
かへし、宣旨の三位殿、

うきにまたかさなる夢を聞きながら驚かさではなどなげきむ  
この兄の爲定の中納言も、後醍醐前の御代には、おぼえ花やかにて、いと時なりしにひきかへ、しめや  
かにつれくと籠り居たれば、祖父の大納言爲世、度々院の御氣色たまはられけれど、いと不用な  
れば、心もとなう思ひわびて、春宮、大夫通顯の君して、後伏見重ねて奏しける。  
和歌のうらに八十あまりの夜の鶴子を思ふ聲のなか聞えぬ

大夫は、うけばりたる傳奏などにてはいませざりけれど、この大納言、歌の弟子にて、さりがたき  
うへ、事のさまも故あるわざなれば、直衣のふところに引き入れて参り給へりけるに、院の上、の  
どやかに出で居させ給ひて、世の御物語など仰せらる。をりよくて、思ひ歎くさまなど、後伏見懇に語  
り申して、ありつる文ひき出でつゝ、御氣色とり給ふ。大方、いとなごやかにおはします君の、ま  
いて、何ばかり罪ある人ならねば、勘じ思すまではなけれど、いさゝかも、武家よりとり申さぬこ  
とを、御心にまかせ給はぬにより、かくとどこほるなるべし。後伏見いと不便にこそ」と宣はせて、  
やがて御かへし、

雲の上に乗えざらめや和歌の浦に老いぬる鶴の子をおもふ聲  
今年は、祭の御幸あるべければ、珍しさに、人々、常よりも、物見車心づかひして、かねてよ  
り、棧敷などもいみじう造れり。使ども、いかで人にまさらむと、互に挑みかはすべし。本院  
新院、廣義門院、一品、宮も、忍びて入らせ給ふなどぞ聞えし。御車寄には、菊亭の右の大臣の御  
子實尹の中納言参り給へり。殿上人も、よき家の君達ども、色ゆりたる限り、いと清らに、このま  
しう出で立ち仕うまつれり。御隨身なども、花を折れるさまなり。出車に、いろくの藤、つゝ  
じ、卯花、撫子、かきつばたなど、さまぐの袖口こぼれ出でたる、いと艶になまめかし。



祭など過ぎて、世の中のどやかになりぬる程に、先帝の御供なりし上達部ども、罪重きかぎり、遠き國々へ遣しけり。洞院按察大納言公敏、頭かしらおろして忍び過されつるも、なほ許り難きにや、小山の判官秀朝とかやいふもの具して、下野の國へときこゆ。

花山院、大納言師賢は、千葉、介貞胤後見て、下總國に下る。五月十日あまりに、都出でられけり。思ひかけざりし有様ども、いみじとも更なり。

別るともなにかなげかむ君すまでうきふるさと、なれる都を

北、方は、花山院、入道右の大臣家定の御女なり。その腹にも、又異腹にも、君達あまたおはすれど、それまでは流されず。上のいみじう思ひ歎き給へるさま、あはれに悲しけれど、今はかぎりの對面だにも許されねば、はるくる方なく、口惜しく、よろづに思ひめぐらされて、いと人わろし。

今はとていのちをかぎる別路は後の世ならでいつを頼まむ

源中納言具行も、同じ頃、東へゐてゆく。數多のなかに、とりわきて重かるべく聞ゆるは、さま異なる罪に當るべきにやあらむ。内にさぶらひし勾當の内侍は、經朝の三位の女なりき。早うより、御門むつまじく思しめして、姫宮などとうで奉りしを、その後、この中納言、未だ下蔭なりし。

時よりゆるし給はせて、この年頃、二つなきものに思ひかはして過しつるに、かくさまなくにつけてあさましき世を、なべてにやは。日にそへて歎き沈みながらも、同じ都にありと聞く程は、吹きかふ風のとよりに、さすが言問ふ慰めもありつるを、遂にさるべき事とは、人の上を見聞くにつけても、思ひまうけながら、なほ今はと聞く心ち、たとへむ方なし。この春、きみの都別れ給ひしに、そこら盡きぬと思ひし涙も、げに残りありけりと、今一しほ、身も流れ出でぬべく覺ゆ。中納言は、「ものもがなや」と、悔しうはしたなき事のみぞ、そこには千々にくだくめれど、めしう人に見えじと、思ひかへしつゝ、つれなくつくりて、思ひ入りぬるさまなり。去年の冬頃、あまた聞えし歌の中に、

ながらへて身はいたづらに初霜のおく方しらぬ世にもふるかな

今ははやいかになりぬるうき身ぞと同じ世にだにとふ人もなし

佐々木、佐渡、判官入道、伴ひてぞ下りける。逢坂の關にて、

歸るべき時しなればこれやこの行くをかぎりのあふ坂の關

柏原といふ所に暫しやすらひて、あづかりの入道、まづ東へ人を遣したる、返事待つなるべし。その程、物語などなさけくしううち言ひかはして、何事も、しかるべき前の世の報に侍るべ



し。御身一つにしもあらぬ身なれば、ましてかひなきわざにこそ。かくたけき家に生れて、弓箭とるわざにかゝづらひ侍るのみ、憂きものに侍りけれ」など、まほならねど、ほのめかすに、心えはてられぬ。隱岐の御送をもつかまつりし者なれば、御道すがらの事など語り出でて、驚き辱ういみじうも侍りしかな。まして、朝夕近うつかう奉りなれ給ひけむ御心ども、さながらなむ、推し量り聞えさせ侍りし。何事も、昔に及び、めでたうおはしまし、御事にて、世くたり時衰へぬる末には、あまりたる御有様にや、かくもおはしますらむとさへ、せめては思ひ給へよらるゝ」など、大方の世につけても、げにと覺ゆるふしく加へて、のどやかに言ひ居るけはひ、おのが程には過ぎにたる御酒など、所につけて、ことそぎあらしくしけれど、さる方にしなして、よきほどにて、下しつる東よりの使、歸り來たるけしき著けれど、殊更に、いひ出づる事もなし。いかならむと、胸うちつぶれて覺ゆるも、かつはいと心弱しかし。いづくの島守となれらむ人もあぢきなく、誰も千歳の松ならぬ世に、なか／＼心盡しこそまさらめ、遂に遁るまじき道は、とてもかくても同じ事、その際の心亂れなくだにあらば、すゞしき方にも赴きなむ、と思ふ心は心として、都の方も戀しう、あはれにさすがなる事ぞ多かりける。

よろづにつけて、事の氣色を見るに、行末遠くはあるまじかめりとさととりぬ。預がほのめかし

しも、なさけありて思ひ知らずれば、同じうはと思ひて、またの日、昔頭おろさむとなむ思ふ」といへば、驚きいとあはれなる事にこそ。東の聞やいかゞと思ひ給ふれど、なむでふ事かは」とて許しつ。かくいふは、六月の十九日なり。かの事は今日なめりと、氣色見しりぬ。思ひまうけながらも猶ためしなかりける報のほど、いかゞ淺くは覺えむ。

消えかゝるつゆの命のはては見つさてもあづまの末ぞゆかしき

猶も思ふ心のあるなめりと、にくき口つきなりかし。その日の暮つかた、終にそこにて失はれにけり。今はの際も、さこそ心の中はありけめど、いたく人わろうもなく、あるべき事とも思へるさまになむ見えける。内侍の待ち聞く心地、いかばかりかはありけむ。やがてさまかへて、近江國高島といふわたりに、昔のゆかりの人々、尊く行ひてすむ寺にぞ立ち入りぬる。

萬里小路中納言藤房は、常陸國に遣さる。父の大納言、母おもとなど、老の末に引き別るゝ心地ども、いへば更なり。身にかへても留めまほしう思へどかひなし。弟の季房の宰相も、頭おろしたりしかど、なほ下野國へ流さる。平宰相成輔は、東へと聞えしかど、それも駿河の國とかやにて失はれける。

又元亨の亂のはじめに流されし資朝の中納言をも、未だ佐渡の島にしづみつるを、この程のついで



でに、かしこにて失ふべきよし、預の武士に仰せければ、この由を知らせけるに、思ひまうけたるよしいひて、都にとどめける子のもとに、あはれなる文書きてあづけけり。既に斬られける時の頌とぞ聞きはべりし。

四 大本 無主

五 蘊本 來空

將頭 傾白 双

但如 鑽夏 風

いとあはれにぞ侍りける。

俊基も同じやうにぞ聞えし。かくのみ、皆さまぐに罪にあたり、遠き世界に放ち捨てらるゝ、おのゝ思ひ歎けども、筆にも及びがたし。大塔の尊雲法親王ばかりは、虎の口を通れたる御さまにて、此處彼處さすらへおはしますも、やすき空なく、いかで過しはつべき御身ならむと、心苦しく見えたり。

隱岐の小島には、月日經るまゝに、いと忍びがたう思さるゝ事のみぞ數添ひける。いかばかりのおこたりにて、かゝる憂きめを見るらむと、前の世のみ、辛くおぼし知らるゝにも、いかでその事をも報いてむと思して、打ちたえて御精進にて、朝夕つとめ行はせ給ふ。法の驗をも試みがてらと、且は思すなるべし。みづから護摩などもたかせ給ふに、いと頼もしき事、夢にも多くなむありけ

る。つれづれに思さるゝをりくは、廊めく所に立ち出でさせ給ひて、遙に浦のかたを御覽じやるに、あまの釣船ほのかに見えて、秋の木の葉の浮べる心地するも、あはれに、「いづくをさしてか」と思さる。

心ざすかたをとほや浪の上に着きてたゞよふ蟹のつり船

「浦こ船のかちをたえ」とうち誦じて、御涙のこぼるゝを、何となく紛はし給へる、いふよしなく心深げなり。ねび給ひにたれど、なまめかしうをかしき御様なれば、所については、ましてやむことなき惜しさを、みづからいとかたじけなしと思さる。

京には、十月になりて、御褖、大嘗會などのいそぎに、天の下物さわがしう、内藏寮、内匠寮、うち殿、染殿、何くれの道々につけて、かしがましうひゞきあひたるも、片つ方は、涙の催しなり。悠紀主基の御屏風の歌、人々に召さる。書くべきものゝなければ、かしこへ參れる行房、中將をや召しかへされましたなど、定めかね給ふを、まだきに傳へ聞しめしければ、夜居の間の靜なるに、御前にことに人もなく、この朝臣ばかり侍ひて、昔今の御物語宣ふついでに、後醍醐都にいふなる事は、いかゞあらむとすらむ。さもあらば、いとこそ羨ましからめ」と、うち仰せられて、火をつくづくと眺めさせ給へる御まみの、忍ぶとすれど、いたうしぐれさせ給へるを見奉るに、中將も、心



強からず、いとかなし。行房（後醍醐天皇）いかばかりの道ならば、かゝる御ありさまを見おき聞えながら、憂うれき故里にはいかで歸らむ」と思ふも、え聞えやらす。後夜（ごや）の御行に、さながらおはしませば、潮風いと高う吹き來るに、霞（あられ）の音さへ堪へがたく聞えて、いみじう寒き夜の氷をうち叩きて閑伽（あか）たてまつるも、山寺（やまでら）の小法師ばらなどの心地ぞするや。少將（しょうじょう）、この中將など（しゅうじょう）櫓折（しほり）りて參れるも、「いつ習ひてか」と、哀に御覽ぜらる。後醍醐天皇（後醍醐天皇）今一度、いかで世を御心にまかするわざもがな」と、人の心の差別（あは）わかるゝにつけても、深う思しまさる事のみ數しらす。

都（みやこ）には、十月二十五日御禊（ごせい）の行幸なり。女御代（にようごだい）には、大炊（おほひ）御門（みかど）、大納言冬信（ふゆのぶ）の女出（にで）さると聞ゆ。十一月十一日より五節（ごせち）はじまる。前（まへ）の御代（ごだい）には、談天門院（だんてんもんいん）の御忌月（ごきげつ）にてとまりにしかば、さう（さう）ん（ん）しかりしに、珍しくて、若き上人（わかし）どもなど、心ことに思へり。隱岐（いんぎ）の御門（みかど）の御めとなりし、吉田の一品（いっぴん）定房（じやうぼう）も、當代（たうだい）につかへて、五節（ごせち）など奉る心のうちぞ、あはれに推し量（おしはか）らるゝ。宣房（のぶらふ）の大納言も、さるべき雜務（ざぶ）の事などには、出で仕（つか）へけり。春宮（はるみや）、大夫（たうふ）は、内大臣（うちだいじん）になりて、大嘗會（おほしほ）の時も、高御座（たかみくら）の行幸に、前行（ぜんこう）とかやいふ事などつとめ給ふ。右（みぎ）の大（おほ）大臣（だいじん）兼（かね）季（せ）も、太政大臣（たうせいだいじん）になりて、清暑堂（せいじゆだう）の御神樂（みかぐら）に、琵琶（びば）つかうまつりなど聞えて、萬（よろづ）めでたくあらまほしくて、年もくれぬ。まことや、この卯月（うづき）の頃より、年の名かはりしぞかし。正慶（せいせい）とぞいふなる。大塔（おほたか）の法親王（ほふしんおう）、楠木（くすのぎ）

の正成（せいせい）などは、なほ同じ心にて、世を傾けむ謀をのみめぐらすべし。正成は、金剛山（こんがうせん）千早（せんはや）といふ所に、いかめしき城をこしらへて、えもいはず武（たけ）きものども、多く籠りゐたり。さて大塔（おほたか）の宮（みや）の令旨（りやうし）とて、國々の兵（つはもの）を語らひければ、世に恨あるものなど、こゝかしこに隠（かく）るへばみてをる限りは、聚（あつ）り集（じ）ひけり。宮は熊野（くまの）にもおはしましけるが、大峯（おほのね）を傳（つた）ひて、しのびく、吉野（よしの）にも、高野（たかの）にも、おはしまし通（とほ）ひつゝ、さりぬべき隈（くま）々（々）には、よく紛（まぎ）れものし給ひて、たけき御有（ごあり）様（さま）をのみ顯（あ）し給へば、いとかしこき大將軍（だいしやうじん）にていますべしとて、附（つ）き隨（ず）ひ聞ゆるもの、いと多くなり行きければ、六波羅（むつばら）にも、東（あづま）にも、いと安からぬ事と、もて騒（さわ）ぎて、猶かの千早（せんはや）を攻めくづすべしといへば、兵（へい）など、のぼり重（かさ）なると聞ゆ。正成は、聖德太子（せいとくたいし）の御堂（ごだう）の前を、軍（いくさ）のそのにして、出（い）で合（あ）ひ駈（か）けひき、寄せつ返（かへ）しつ、潮（しほ）の満（み）ち引（ひ）く如（ごと）くにて、年はたゞ暮（くれ）れに暮（くれ）ればはてぬれば、春（はる）になりて、事どもあるべしなど言ひしろふも、いとむづかしう、心ゆるびなき世のありさまなり。さて日野大納言俊光（ひののぶみつ）といひしは、文保（ぶんぽう）の頃、始めて大納言（だいなごん）になりしを、いみじき事に、時の人いひ騒（さわ）ぐめりしに、その子、この頃、院（いん）の執權（しつけん）にて、資名（すけな）といふ、又大納言（だいなごん）になりぬ。めでたく度をさへ重ねぬる、いといみじかめり。前（まへ）の御代（ごだい）にも、定房（じやうぼう）一品（いっぴん）して、宣房（のぶらふ）大納言（だいなごん）になされなどせしをば、斯（か）う様（さま）にぞ、人思（ひとし）ひいふめりし。



内には、女御もいまだ候ひ給はぬに、西園寺の故内大臣殿の姫君、廣義門院の御傍に、今御方と  
かや聞えて、かしづかれ給ふを、まゐらせ奉り給へれば、これや后がねと、世の人も、まだきにめ  
でたく思へれど、いかなるにか、御覚えいとあざやかならぬぞ口惜しき。三條前、大納言公秀の女、  
三條とてさぶらはるゝ御腹にぞ、宮々あまた出でものし給ひぬる、つひの儲の君にてこそおはしま  
すめれ。  
光嚴  
源子  
三條  
源子  
源子

### 第二十 月草の花

かの島には、春來ても、なほ浦風さえて浪あらく、渚の氷も解けがたき世のけしきに、いとおぼ思  
し結むすぼるゝ事盡つきせず。かすかに心こゝろほそき御住居に、年さへ隔りぬるよと、あさましく思おもさる。候  
ふ人々も、しばしこそあれ、いみじく屈くじにたり。今年は正慶二年といふ。閏二月あり。後の二月  
のはじめつ方より、とりわきて、密教みつぎょうの秘法ひほうを試みさせ給へば、夜も大殿籠らぬ日數へて、さすが  
にいたう困こじ給ひにけり。心ならずまどろませ給へる曉方、夢うつゝともわかぬ程に、後宇多院、  
ありしながらの御面影おんおもかげさやかに見え給ひて、聞えしらせ給ふこと多かりけり。うち驚おどきて、夢なり  
けりと思おもす程、いはむ方なく名残なごりかなし。御涙もせきあへず、「さめさらましを」と思おもすもかひな  
し。源氏の大將、須磨の浦にて、父御門見奉りけむ夢の心地し給ふも、いとあはれに頼たのもしう、い  
よ／＼御心強こゝろさまさりて、かの新發意しんぱついが御迎へのやうなる釣船つりぶねも、たより出で來なむやと、待たる  
る心地し給ふに、大塔の宮よりも、海人のたよりにつけて、聞え給ふ事絶えず。  
都にも、猶世の中しづまりかねたる様に聞ゆれば、よろづに思おもし慰なぐさめて、關守せきもりのうら寝るひまを



のみ窺ひ給ふに、しかるべき時の至れるにや、御垣守にさぶらふ兵ども、御氣色をほの心えて、靡き仕うまつらむと思ふ心つきにければ、さるべき限り語らひ合せて、おなじ月の二十四日の曙に、いみじくたばかりて、隠ろへ率て奉る。いとあやしげなる蟹の釣船のさまに見せて、夜ふかき空の暗き紛におしひだす。折しも、霧いみじうふりて、行くさきも見えず、いかさまならむと危けれど、御心をしづめて念じ給ふに、思ふ方の風さへ吹きすゝみて、その日の申の時に、出雲の國に著かせ給ひぬ。ここにぞ、人々心地しづめける。

おなじ二十五日、伯耆國稻津浦といふ所へうつらせ給へり。この國に、奈和の又太郎長年といひてあやしき民なれど、いと猛に富めるが、類ひろく、心もさかしく、むねしくしきものあり。かれがもとへ宣旨を遣し給ひたるに、いと辱しと思ひて、とりあへず、五百餘騎の勢にて、御迎にまゐれり。又の日、賀茂の社といふ所にたち入らせ給ふ。都の御社思し出でられて、いと頼もし。それより船上寺といふ所へおはしませせて、九重の宮になすらふ。これよりぞ、國々の兵どもに、御敵を亡すべきよしの宣旨つかはしける。北叡の山へも上せられけり。

かくて隠岐には、出でさせ給ひにし晝つ方より、騒ぎあひて、隠岐の前の守追ひて参るよし聞ゆれば、いとむくつけく思されつれど、こゝにもその心して、いみじう戦ひければ、引き返しにけり。京にも東にも、驚きさわぐさま思ひやるべし。正成が城の圍に、そこらの武士ども、かしこに集ひをるに、かゝる事さへ添ひにたれば、いよく、東よりも上り集ふめり。

三月にもなりぬ。十日あまりのほど、俄に世の中いみじうのゝしる。何ぞと聞けば、播磨の國より、赤松なにがし入道圓心とかやいふもの、先帝の勅に従ひて攻めくるなりとて、都の中あわて惑ふ。例の六波羅へ行幸なり。兩院も御幸とて、上下たちさわぐ。馬車走りちがひ、武士どものうちこみのゝしりたる様いと恐し。されど、六波羅の軍つよくて、その夜は、かのものども引き返しぬとて、少し静まれるやうなれど、かやうにいひ立ちぬれば、猶心ゆるびなきにや、そのまゝ院も御門もおはしませば、春宮もはなれ給へる、宜しからぬ事とて、二十六日六波羅へ行啓なる。内の大臣御車にまゐり給ふ。傳は久我の右の大臣にいますれど、大方の儀式ばかりにて、よろづ、この内大臣、御後見つかまつり給へば、未だ幼なる御程を後めたがりて、宿直にもやがて候ひ給ふ。御修法のために、法親王たちも候はせ給へり。こゝもかしこも軍とのみ聞えて、日數経るに、院よりの仰とて、上達部、殿上人までも、ほどくゝに隨ひて、兵を召せば、弓ひく道もおぼくしき若侍などをさへぞ奉りける。げに臂も折りぬべき世の中なり。かやうにいひしろふ程に、三月も暮れぬ。



卯月十日あまり、又東より武士多くのぼる中に、一昨年笠置へ向ひたりし、足利の治部、大輔源高氏のぼれり。院にも頼もしく聞し召して、かの伯耆の船上へ向ふべきよし、院宣賜はせけり。東を立ちし時も、後めたく二心あるまじきよし、疎ならず誓言文を書きてけれども、底の心やいかゞあらむ、とかく聞ゆる筋もありけり。この高氏は、古の頼義朝臣の名残なりければ、もとの根ざしは、やむごとなき武士なれど、承久よりこのかた、頭さし出す源氏もなくて、埋もれ過しながら、類ひろく、勢四方にみちて、國々に心よせのもの多ければ、かやうに國の危き折を得て、思ひたつ道もやあらむなど、したにさゝめくも著くぞ見えし。

伯耆國へ向ふべしといひなして、まづ西山大原わたりに一とまりして、五月七日、ほのくくと明くる程より、大宮の木戸どもをおし開きて、二條より下、七條の大路を東さまに、七手に分れて、旗をさしつゞけて、六波羅をさして、雲霞の如くたなびき入るに、更に面を向ふるものなし。この治部の大輔、はやうより、先帝の勅を承りてければ、さかさまに都を亡さむとするなりけり。関つくるとかやいふ聲は、雷の落ちかゝるやうに、地の底も響き、梵天の宮の中も聞き驚き給ふらむと思ふばかり、とよみあひたるさま、來し方行く先くれて、もの覺ゆる人もなし。御門、春宮、院の上、宮たちなど、まして一人賢しきもおはしませず。絲竹の調をのみ、聞し召しならひたる御心ど

もに、珍かに疎ましければ、たゞあきれ給へり。武士ども半を分けて、金剛山へ向ひたれば、さならぬ残り、都にあるかぎりは戦をなす。今を限りの軍なれば、手を盡してのゝしるほど、まねびやらむ方なし。雨の脚よりも繁く走りちがふ矢にあたりて、目のまへに死をうくるもの數を知らず。一日一夜いりもみとよみ明すに、兩六波羅にも、残る手なく防ぎつれど、遂に陣の内破られて、今はかくと見えたり。日ごろ候ひ籠り給へる上達部、殿上人なども、今日と思ひまうけたらむだに、君のおはしまさむ限りは、いかでまかでも散らむ。まして、かねてより、かく構へけるをも知るしめさで、昨日かとよ、當代の宣旨を賜りしものゝ、かくうらがへりぬれば、誰か思ひよらむ。すべて上下となく、ひとつに立ちこみて、あわて惑ひたり。

日ぐらし、八幡、山崎、竹田、宇治、勢多、深草、法性寺など、燃えあがる煙ども、四方の空にみちくして、日の光も見えず、墨をすりたる様にて暮れぬ。こゝにも火かゝりて、いとあさましければ、いみじう固めたりつる後の陣を、辛うじて破りて、それより免れ出でさせ給ふ御心地ども、夢路をたどるやうなり。内の上も、いとあやしき御姿に、殊更やつしたてまつる、いとまがくし。兩院も御手をと리카はすといふばかりにて、人に扶けられつゝ出でさせ給ふ。上達部、大臣たちは、袴のそばとりて、冠などの落ちゆくも知らず、空を歩む心地して、あるは河原を西へ東へ、



さまざま散々になり給ふ。兩六波羅仲時益東をさして、東へと心がけて落ちければ、御幸も同じさまになし奉りけり。西園寺の大納言公宗は、北山へおはしにけり。右衛門、督經顯、左兵衛、督隆蔭、資明の宰相などは、御幸の御供にまゐらる。按察の大納言資名は、足を損ひて、東山わたりにとまりぬなど言ひしは、如何ありけむ。内大臣殿は、御子の別當道冬を伴ひ給ひて、八日の曙のいまだ暗きほどに、我が御家の三條坊門萬里、小路におはしましつきたるに、歩み入り給ふほど心もとなくて、北の方門へ走り出でて、平かに歸りおはしたると思ふうれしさに、急ぎて見れば、おとどは御直衣に指貫ひきあげ給へば、しるく見え給ふ。別當は、道の程のわりなきに、折烏帽子に布直垂といふものうち著て、細やかに若き人の、御前どもに紛れたれば、頓にも見えす。火などもわざとなければ、暗きほどの黒白わかれぬに、はやういかにもなり給へるにやと、心ち惑ひて、北方御方は、いかに〜と、聲もわな〜きて聞えける。いと理にいみじう哀なり。

さて御幸は、近江國におはします程に、伊吹といふほとりにて、なにがしの宮とかや、法師にていましけるが、先帝の御心よせにて、かやうの方もほの心え侍りけるにや、待ちうけて矢を放ち給ふ。又京よりも追手かゝるなど聞えければ、六波羅の北といひし仲時、内、春宮、兩院具し奉り、番馬といふ所の山のうちに入れ奉りぬ。手のものども、なほ残りて隨ひつきけれども、戦もかな

はずやありけむ、遂にこの山にて腹切りにけり。おなじき南時益といひしは、これまでも参らず、守山の邊にて失せにけりとぞ聞えし。あやなくいみじき事のさまなり。御所々の御供には、俊實の大納言、經顯の中納言、頼定の中納言、資名の大納言、資明の宰相、隆蔭などぞ残り候ひける。俊實、資名、頼定などは、やがてそこにて鬻きりてけり。一、院は歸り入らせ給ふ。御門に、御文を奉り給ひて、「面々に御出家あるべし」などまで申させけれども、思ひも寄らぬよしを、かたく申され給ひけるとかやとぞ聞えし。

伯耆の御所へは、人々参りつどふ。上達部、殿上人數しらす。さる程に、東にもかねて心えけるにや。高氏の末の一族なる新田、小四郎義貞といふもの、今の高氏の子四になりけるを大將軍にして、武藏國より軍をおこしけり。この頃の東の將軍は、守邦親王にておはします。御後見つかまつる高時入道、貞顯入道、城介入道圓明、長崎入道圓基などいふものども、驚きさわぎて、高時入道の弟に四郎左近、大夫泰家といひし、今は入道したるをぞ、大將に下しける。五月十四日、鎌倉を立ちてむかふ。その勢十萬餘騎、高時入道の一族付き隨ふものそこら満ちひろごりて、鎌倉はじまりし頼朝の世、時政より今に至るまで、多くの年月をつめり。僅なる新田などいふ國人に、たやすく、いかでかは亡さるべきと覺えしに、程なく十五日に、敵既に鎌倉に近づくよし聞えて、家々



を毀ち騒ぎのゝしる。世の既に滅するにやと覺えしとぞ、人は語り侍りし。四郎左近、大夫入道、軍にうち負けゝるにや、隨ふ武士ども、残りなく新田が方へつきぬれば、えさらぬ者どもばかり、五六百騎にて、十六日の夜に入りて、鎌倉へ引きかへる。僅に中一日にて、かくなりぬる事、夢かとぞ覺えし。かくて、日々の軍にうち負けゝれば、おなじき二十二日、高時以下腹切りて失せにけり。

さて都には、伯耆よりの還御とて、世の中ひしめく。まづ東寺へ入らせ給ひて、事ども定めらる。二條の前の大臣平召しありて参り給へり。此度内裏へ入らせ給ふべき儀、重祚などにてあるべけれど、璽の箱を御身にそへられたれば、只遠き行幸の還御の儀式にてあるべきよし定めらる。關白をおかるまじければ、二條の大臣、氏長者を宣下せられて、都の事管領あるべきよし承る。天の下、只この御計らひなるべしとて、このひとつあたり喜びあへり。六月六日、東寺より、常の行幸のさまにて、内裏へぞ入らせ給ひける。めでたしとも言の葉なし。「去年の春いみじかりしはや」と思ひ出づるも、たとしへなく、今も御供の武士ども、ありしよりは、なほ幾重ともなく、打圍み奉れるは、いとむくつけき様なれど、こたみは疎ましくも見えず。頼もしくて、めでたき御守護かなと覺ゆるも、うちつけ目なるべし。世のならひ、時につけて移る心なれば、皆さぞあるら

し。

先陣は二條富小路の内裏につかせ給ひぬれど、後陣の兵は、なほ東寺の門まで続きひかへたりしとぞ聞えしは、まことにやありけむ。正成も仕うまつれり。かの名和の又太郎は、伯耆守になりて、それも衛府のものどもにうち交りたる、珍しくさまかはりて、ゆすり満ちたる世の氣色、かくもありけるを、などあさましくは歎かせ奉りたりけるにか」と、めでたきにつけても、猶前の世のみゆかし。車などたち續きたるさま、ありし御下には、こよなくまされり。物見ける人の中に、昔だに沈むうらみをおきの海に波たちかへる今ぞかしこき

昔の事など思ひあはするにやありけむ。

金剛山なりし東の武士ども、さながら頭を垂れて参り競ふさま、漢の始もかくやと見えたり。禮成門院も又中宮と聞えさす。六日の夜、やがて内裏へ入らせ給ふ。去にし年御髪おろしにき。御惱なほおこたらねば、いつしか五壇の御修法はじめらる。八日より議定行はせ給ふ。昔の人々残りなく参りつどふ。

十三日、大塔の法親王都に入り給ふ。この月頃に、御髮生して、えもいはず清らかなる男になり給へり。唐の赤地の錦の御鎧直垂といふもの奉りて、御馬にてわたり給へば、御供に、ゆゝしげな



る武士ども打圍みて、御門の御供なりしにも、ほとく劣るまじかめり。速に將軍の宣旨をか  
 うぶり給ひぬ。流されし人々、程なく競ひのぼるさま、枯れにし木草の春にあへる心地す。その中  
 に、季房の宰相入道のみぞ、預なりけるもの、情なき心ばへやありけむ、東のひしめきの紛に  
 失ひてければ、兄の中納言藤房は歸り上れるにつけても、父の大納言、母の尼上など、歎き盡きせ  
 ず、胸あかぬ心地してけり。四條中納言隆資といふも、頭おろしたりし、また髪おほしぬ。もとよ  
 り塵を出づるにはあらず。敵のために身を隠さむとて、かりそめに剃りしばかりなれば、今はた更  
 に眉をひらく時になりて、男になれらむ、何の憚かあらむとぞ、おなじ心なるどち、言ひあはせ  
 ける。天台座主にていませし法親王だに、かくおはしませば、まいてとぞ。誰にかありけむ、その  
 ころ聞きし。

すみぞめの色をかへつ月草の移ればかはる花のころもに

増鏡終

昭和十年十二月五日印刷  
 昭和十年十二月十日發行

いてふ本

増鏡

定價

金五拾錢

川中郷村所山石山泉杉山沼  
 添島上田村内谷田波  
 文悦自靜金三貞素斜代美瓊  
 子次巖人藏子吉行汀水妙音

不許  
 複製

發行所

東京市中野區高根町六番地

三教書院

營業所  
 東京市神田區錦町一ノ十五  
 電話神田二四〇八番  
 振替東京四五八〇番

編輯者 三教書院編輯部

代表者 鈴木種次郎

發行者 東京市中野區高根町六番地 鈴木種次郎

印刷者 東京市本所區東駒形三丁目十番地 西野末雄

印刷所 東京市本所區東駒形三丁目十番地 文化印刷株式會社

印刷所 東京市本所區東駒形三丁目十番地 文化印刷株式會社

(本製野浦・京東)



67  
447

現今の讀書界が嘗ての諸外來思想偏重の移對  
 として新注自國の過去に於ける然產物  
 吾は出版界を喜ぶべき現象である。當  
 如何なる非多きは、暫く措き、發見さ  
 るるもの多きを、著者一般の豫約は、  
 等しい。著者の多きを、著者一般の豫約は、  
 もとの多きを、著者一般の豫約は、  
 大に、著者の多きを、著者一般の豫約は、  
 當分の多きを、著者一般の豫約は、  
 幅の多きを、著者一般の豫約は、  
 一、著者の多きを、著者一般の豫約は、  
 ざる、著者の多きを、著者一般の豫約は、  
 ず、著者の多きを、著者一般の豫約は、  
 多く、著者の多きを、著者一般の豫約は、  
 である。著者の多きを、著者一般の豫約は、

昭和十年五月

三教書院主

いてふ本刊行の辭

論日	雨燕	俳西	近源	神愚	增徒	義會	平枕	萬古	古
本月	村諧	松氏	皇	正管	然經	我	家	草葉	事
外物	部部	中語	統	抄	鏡草	記	上	上	記
語史	語集	集集	物物	花	記	上	中	下	全
全上	全全	全全	全全	全全	全全	全全	全全	全全	全全
いろ	釋迦	紫田	東海	新編	日連	益駿	白武	武三	唐文
は文	八相	舍源	道中	水滸	連大	軒臺	隱將	體詩	章軌
庫上	相倭	氏全	一・二	畫傳	附家	養生	法感	七	詩選
下二	文庫	上四	三・四	全	道訓	話集	狀記	全全	全全

いてふ本既刊目錄 昭和十年十二月現在

和綴の表紙は始めに糸の綴目の處にしつかりと折り目を付けて下さい。さうすれば表紙に皺がよらず耐久力は殆ど永久的です。





終

